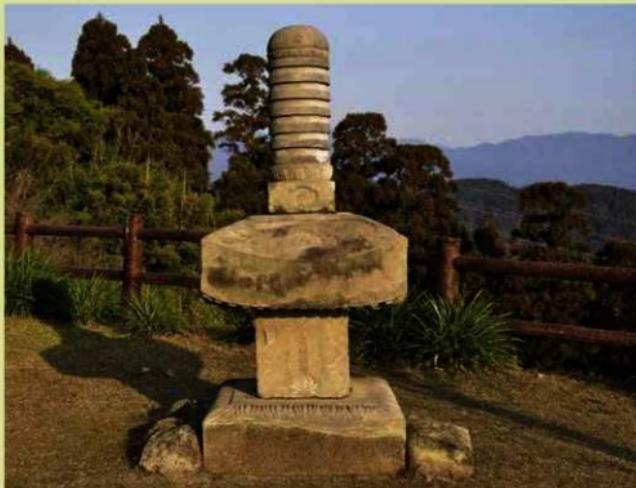


みや さき し な い い せき はつ くつ ちよう さ ほう こく しょ
宮崎市内遺跡発掘調査報告書

平成21年度・平成22年度国庫補助対象事業発掘調査報告書



2012

宮崎市教育委員会

宮崎市内遺跡発掘調査報告書

平成21・22年度国庫補助対象事業発掘調査報告書

弓袋第2遺跡

下北方花切第1遺跡

下北方戸林第1遺跡

2012

宮 崎 市 教 育 委 員 会

序

本書は、平成21年度、22年度に国庫補助を受け発掘調査をおこなった遺跡の調査報告書です。

下北方花切第1遺跡、下北方戸林第1遺跡は、宮崎市街地の北側、下北方台地上に営まれた遺跡です。この台地上には数多くの遺跡が密集しており、それらを一括して下北方遺跡群と呼称しています。今回報告をおこなう2つの遺跡も、この遺跡群の一部に位置付けられるものです。今回の発掘調査は2件とも規模は小さいのですが、地域の歴史を紐解く一助になるものだと思われます。

弓袋第2遺跡は高岡町内山、天ヶ城の西隣にある尾根上に所在する遺跡です。豊臣秀吉が関白となった天正13年（1585）に建てられた石塔が確認されるなど、やはり小規模な発掘調査ではありますが、地域の歴史を考える上では注目される成果が得られています。

このように開発に伴う発掘調査によって、多くの歴史が明らかにされる一方で、その数だけ先人の記憶を残した遺跡が破壊されていることも、私達は胸に留めなければならないと思います。

最後に、発掘調査にあたりご協力いただきました関係機関の皆様、発掘調査に従事された作業員の皆様など、関係者の皆様に心より厚くお礼申し上げます。

平成24年3月

宮崎市教育委員会

教育長 二 見 俊 一

例　　言

1. 本書は、平成21、22年度に実施した国庫補助対象事業の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査組織
調査主体　宮崎市教育委員会
(平成21年度)　(平成22年度)

文化財課	課長　永井　淳生	文化財課	課長　田村　泰彦
埋蔵文化財係	係長　富永　英典	埋蔵文化財係	係長　富永　英典
予算執行	主査　松崎　留美	予算執行	主事　戸高　佑輔
調整事務	主任技師　稲岡　洋道	調整事務	主任技師　稲岡　洋道
調査員	主任技師　石村　友規	調査員	主任技師　石村　友規
	嘱託　鈴木　弘子		技師　西嶋　剛広
			嘱託　今村　結記
			川野　誠也

整理作業嘱託・整理作業員

(平成23年度)

文化財課	課長　田村　泰彦
埋蔵文化財係	主幹兼係長　富永　英典
予算執行	主任主事　岩切　瞳
調整事務	主任技師　稲岡　洋道
調査員	主任技師　石村　友規
	主任技師　西嶋　剛広
	嘱託　川野　誠也

整理作業嘱託・整理作業員
3. 発掘調査により出土した遺物及び調査における図面、写真等は宮崎市教育委員会で保管している。
4. 現地における空中写真撮影は、有限会社スカイサーベイ九州に、弓袋第2遺跡の基準点、水準点測量、石塔、蝶敷の実測は株式会社イビソクに委託した。
5. 掲載した遺構図面の実測、写真撮影は各調査員が、遺物図面の実測は整理作業嘱託員、整理作業員が行い、製図・図版の作成は下北方花切第1遺跡を石村が、下北方戸林第1遺跡、弓袋第2遺跡を西嶋が行った。
6. 遺物写真撮影・製図・図版の作成は下北方花切第1遺跡を石村が、下北方戸林第1遺跡、弓袋第2遺跡を西嶋が行った。
7. 本書は第I章を石村が、第II章を西嶋が、第III章は第3節を西嶋・川野が、その他の節を西嶋が執筆した。また編集は石村が行った。
8. 本書において使用する座標は世界測地系である。

目 次

第 I 章 下北方花切第 1 遺跡	
第 1 節 遺跡の位置と環境	1
第 2 節 調査に至る経緯と経過	3
第 3 節 調査の成果	5
第 4 節 まとめ	17
写真図版	19
第 II 章 下北方戸林第 1 遺跡	
第 1 節 遺跡周辺の環境	25
第 2 節 調査に至る経緯と調査の経過	27
第 3 節 調査の成果	28
第 4 節 まとめ	32
写真図版	33
第 III 章 弓袋第 2 遺跡	
第 1 節 遺跡周辺の環境	37
第 2 節 調査に至る経緯と調査の経過	39
第 3 節 調査の成果	40
第 4 節 まとめ	57
写真図版	59
挿図目次	
第 I 章 下北方花切第 1 遺跡	
第 1 図 下北方花切第 1 遺跡と周辺の遺跡	2
第 2 図 調査区位置図	3
第 3 図 道構配置図及び調査区北壁土層断面図	4
第 4 図 土坑墓 1 及び出土遺物実測図	5
第 5 図 壁穴建物 1・2 及び土器埋設炉実測図	6
第 6 図 壁穴建物 1 出土遺物実測図	7
第 7 図 壁穴建物 3 及び竈・土器埋設炉実測図	9
第 8 図 壁穴建物 3 出土遺物実測図	10
第 9 図 壁穴建物 4 及び出土遺物実測図	11
第 10 図 土坑 5・6 実測図	12
第 11 図 溝 1 及び出土遺物実測図	13
第 12 図 土坑 1・2 及び出土遺物実測図	14
第 13 図 土坑 3・4 及び出土遺物実測図	15
第 14 図 道構外出土遺物実測図	15
第 II 章 下北方戸林第 1 遺跡	
第 1 図 周辺の遺跡	26
第 2 図 調査区位置図	27
第 3 図 調査区平面図	28
第 4 図 調査区壁面土層断面図	29
第 5 図 出土遺物実測図	30
第 III 章 弓袋第 2 遺跡	
第 1 図 周辺の遺跡	38
第 2 図 調査区平面図	41
第 3 図 南区南壁土層断面図	42
第 4 図 石塔 1 実測図	44
第 5 図 石塔 1 下部構造・ 土壘 1 土層断面図	45・46
第 6 図 花活実測図	47
第 7 図 石塔 2 実測図	48
第 8 図 集石造構実測図	49
第 9 図 土坑墓 1 及び出土遺物実測図	50
第 10 図 土坑 1・2 実測図	52
第 11 図 道構外出土遺物実測図	53

表目次

写真図版 4	62
写真図版 5	63
写真図版 6	64

第Ⅰ章 下北方花切第1遺跡

第1表 遺物観察表	16
-----------------	----

第Ⅱ章 下北方戸林第1遺跡

第1表 遺物観察表	31
-----------------	----

第Ⅲ章 弓袋第2遺跡

第1表 遺物観察表	54
第2表 出土銭貨観察表 1	55
第3表 出土銭貨観察表 2	56

写真図版

第Ⅰ章 下北方花切第1遺跡

写真図版 1	19
写真図版 2	20
写真図版 3	21
写真図版 4	22
写真図版 5	23
写真図版 6	24

第Ⅱ章 下北方戸林第1遺跡

写真図版 1	33
写真図版 2	34
写真図版 3	35
写真図版 4	36

第Ⅲ章 弓袋第2遺跡

写真図版 1	59
写真図版 2	60
写真図版 3	61

第Ⅰ章 下北方花切第1遺跡

第1節 遺跡の位置と環境

1. 地理的環境

下北方花切第1遺跡は宮崎市街地の北方、通称下北方台地上に所在する。この下北方台地は、垂水台地を基点に南に延びる舌状台地の南端部に位置している。台地の基盤は宮崎層群であり、その上に火山灰が堆積することによって形成された標高20~30m程度の低位部と、現在平和台公園が所在する標高30~50m程度の高位部（丘陵部）に分けられる。本遺跡が立地するのは低位部であり、下北方花切第1遺跡以外にも多くの遺跡、古墳が立地する。台地の西側は大淀川が東流から南流へと方向を変化する位置に当たり、台地と大淀川が非常に近接している。このため大淀川を利用した交通を考えると非常に重要な立地と言える。

2. 歴史的環境

下北方台地は全時代を通じて遺跡が確認され、市内でも随一の遺跡密集地である。

旧石器時代、縄文時代の遺構、遺物の確認事例は少数ではあるが、台地の南東高位部に位置する下郷遺跡においてナイフ形石器、縄文早期土器、集石遺構等が確認されている。

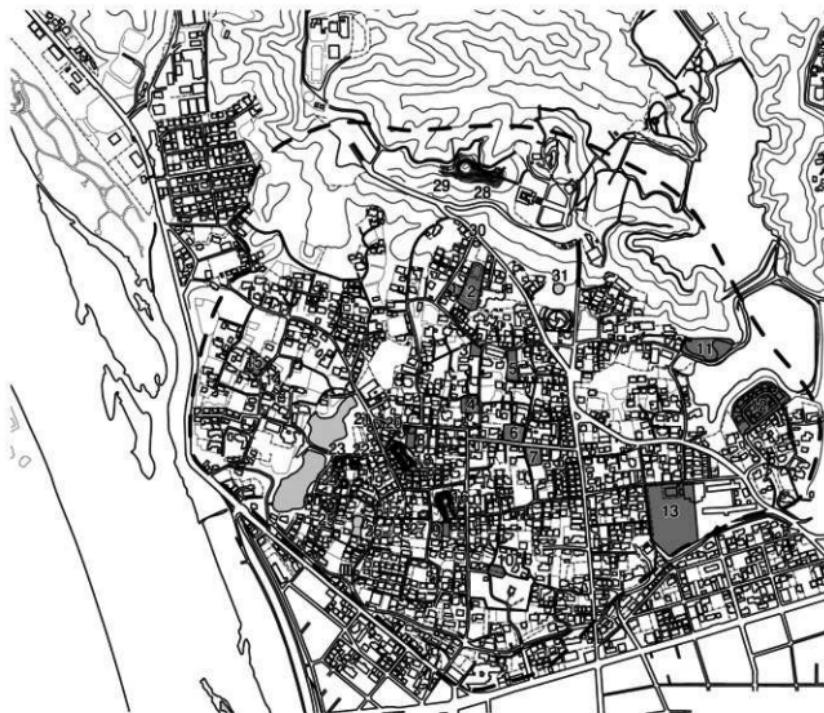
弥生時代になると下郷遺跡において中期から後期に至る環壕集落が形成される。環壕内側からは堅穴建物や堅穴状遺構、土坑、貯藏穴が検出され、また前述の遺構や環壕内から多数の遺物が出土している。特に後期段階になると多量の遺物が確認され、下郷遺跡が周辺地域内の拠点的集落であったことを物語っている。

続く古墳時代前期に位置付けられる遺跡は下北方台地上では現在まで確認されていない。この時期には大淀川を挟んだ対岸の跡江台地上に生目古墳群が形成されている。中期になると下北方台地上においても集落の形成、古墳の築造が開始される。集落の全容は明らかではないが下北方下郷第4遺跡において中期前葉の堅穴建物2軒、下北方塚原第2遺跡において中期後半から後期初めの堅穴建物が2軒確認されている。中期中葉から後期には前方後円墳4基、円墳12基、地下式横穴墓22基からなる下北方古墳群が形成される。9号墳下に構築されている下北方地下式横穴第5号からは短甲や馬具、金製垂飾付耳飾など豊富な副葬品が出土している。

古代では下北方塚原第2遺跡において古代寺院跡と想定される大型掘立柱建物などの遺構と多量の瓦が出土している。またその周辺の下北方塚原第1遺跡、下北方5号墳周辺遺跡、下北方下郷第4遺跡、下北方1号墳周辺遺跡においても古代瓦が出土しており、古代寺院（もしくは郡衙）とその関連施設が台地上に展開していたと想定される。

中世は下北方下郷第4遺跡で土坑墓が検出されるなど、個別の遺構、遺物は確認されているが、台地上の様相は明らかではない。ただし台地北方の丘陵上には日向の拠点的城郭の1つである宮崎城が所在する。

近世になり宮崎城は元和の一国一城令により廃城となるが、下北方周辺は延岡藩の飛地として現在の大宮中学校付近に延岡藩の代官所が設置され、この地域の政治的中心地となる。



- | | | |
|---------------|---------------|-------------|
| 1. 下北方花切第1遺跡 | 12. 下郷遺跡 | 23. 下北方8号墳 |
| 2. 下北方花切第2遺跡 | 13. 大宮中学校遺跡 | 24. 下北方9号墳 |
| 3. 下北方塚原第1遺跡 | 14. 下北方戸林第1遺跡 | 25. 下北方10号墳 |
| 4. 下北方塚原第2遺跡 | 15. 下北方戸林第2遺跡 | 26. 下北方11号墳 |
| 5. 下郷第2遺跡 | 16. 下北方1号墳 | 27. 下北方12号墳 |
| 6. 下郷第3遺跡 | 17. 下北方2号墳 | 28. 下北方13号墳 |
| 7. 下郷第4遺跡 | 18. 下北方3号墳 | 29. 下北方14号墳 |
| 8. 下北方5号墳周辺遺跡 | 19. 下北方4号墳 | 30. 下北方15号墳 |
| 9. 下北方1号墳周辺遺跡 | 20. 下北方5号墳 | 31. 下北方16号墳 |
| 10. 横小路遺跡 | 21. 下北方6号墳 | |
| 11. 平和台下遺跡 | 22. 下北方7号墳 | |

-----は下北方遺跡群の範囲

第1図 下北方花切第1遺跡と周辺の遺跡 (S = 1/10000)



第2図 調査区位置図 (S = 1/1000)

第2節 調査に至る経緯と経過

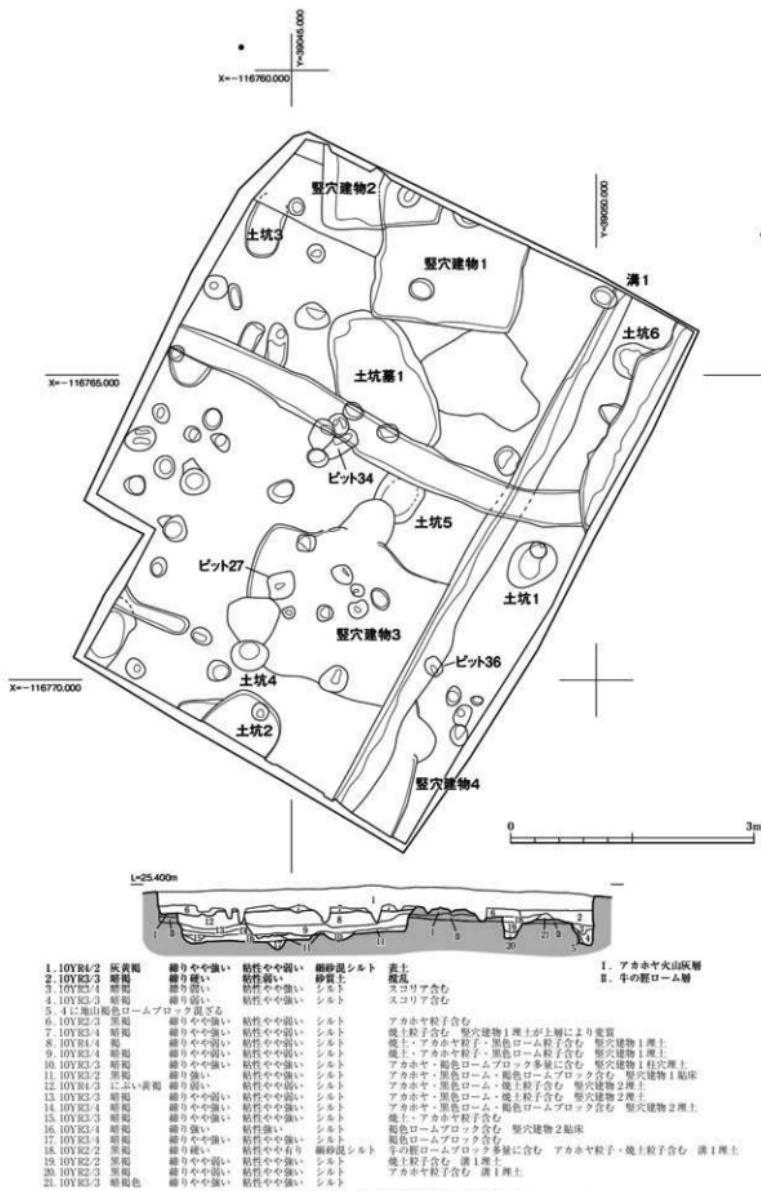
1. 調査に至る経緯

平成21年7月9日、個人住宅建築に伴い事業者から宮崎市下北方町花切5681-4における埋蔵文化財所在の有無について、宮崎市教育委員会教育長あてに照会がなされた。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地「下北方遺跡群」内であり、遺構が残存している可能性が高いことから、市教育委員会では平成21年7月21日から7月29日の間に試掘調査を実施した。結果として、事業予定地内から堅穴建物やピット等の遺構、それに伴う遺物が確認されたことから、宮崎市教育委員会と事業者間において埋蔵文化財の取り扱いについて協議を重ね、事業により影響を免れない72m²について本発掘調査を実施することとした。

2. 調査経過

現地における発掘調査は平成21年12月7日から開始した。まず重機により表土を除去した後に作業員を投入し、人力で包含層の掘削と遺構検出をおこなった。遺構の掘削は12月9日から随时、写真撮影、トータルステーションによる測量、手計り測量の記録作業を行なながら進めた。12月25日に調査終了時状況を記録する空中写真撮影をおこない、12月28日に調査区を埋め戻し調査を終了した。延べ調査日数は15日間である。

整理作業は遺物の洗浄のみを平成22年2月15日から2月18日の期間に行い、残りの作業を平成23年4月11日から4月22日の期間に行った。



第3図 遺構配置図及び調査区北壁土層断面図 (S=1/60)

第3節 調査の成果

1. 調査成果の概要

今回の調査で確認された遺構は、堅穴建物4軒、土坑墓1基、土坑6基、溝状遺構1条、ピット48基であった。堅穴建物は何れも上部の削平が激しく、堅穴建物3、4の2軒については貼床の一部と竈下部が残存するのみであった。火處が確認されたのは3軒で、堅穴建物1は土器埋設炉、堅穴建物3は竈と土器埋設炉、堅穴建物4は竈が検出された。土坑墓も上部が削平を受けていたが、土坑墓中央部と東寄りにおいて、腐食が激しいものの、鉄鎌、刀子が出土した。土坑では土坑4から完形の中世土師器皿が出土した。

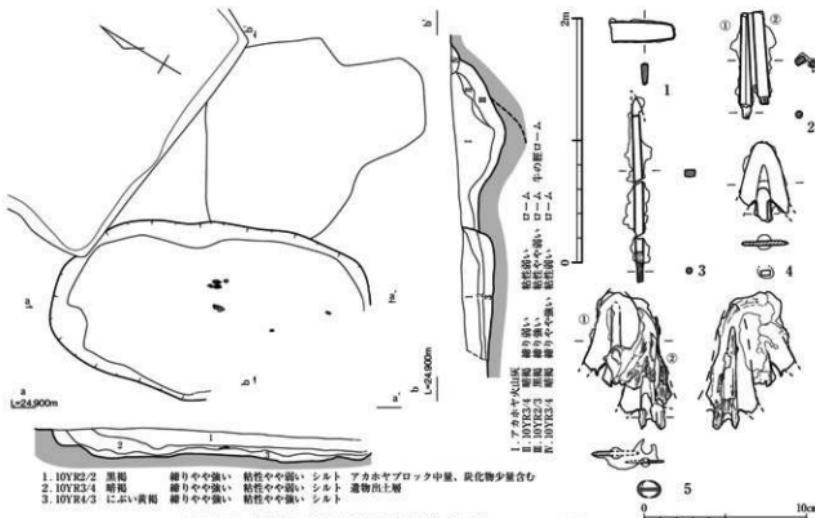
遺物は遺構と同様に古代の遺物が中心であり、他の時期としては、古墳時代後期と中世の少量の遺物、弥生時代後期の遺物が僅かに出土した。また破片のため大多数が図化できなかったが、遺構内外から内面に布目痕跡のある古代の製塙土器が多数出土した。

2. 古墳時代の遺構・遺物

土坑墓1

遺構 調査区中央で堅穴建物1、搅乱溝に切られる形で検出された。長軸2.6m、短軸1.4m、残存深は0.24mを測り、平面は楕円形を呈する。遺物は床面からやや浮いた位置で出土した。

遺物 鋸と腐食が激しく、図化が困難なものが多かった。1は刀子である。刃部を欠損し茎部のみの残存である。2、3は長頸鎌である。2は2本の鎌が接着している。3は残りが悪いが片刃とみられる。4、5は腸抉長三角鎌である。5は2本が接着している。いずれも遺存状態が悪い。他に長頸鎌数本、土師器小片が出土したが、図化に耐えうるものではなかった。



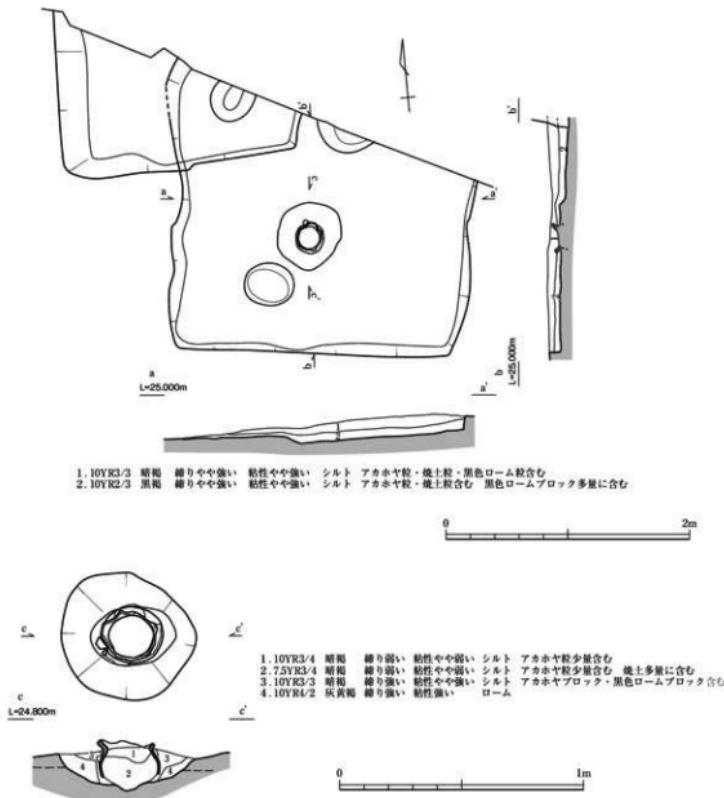
第4図 土坑墓1及び出土遺物実測図（遺構 S=1/40・遺物 S=1/3）

3. 古代の遺構・遺物

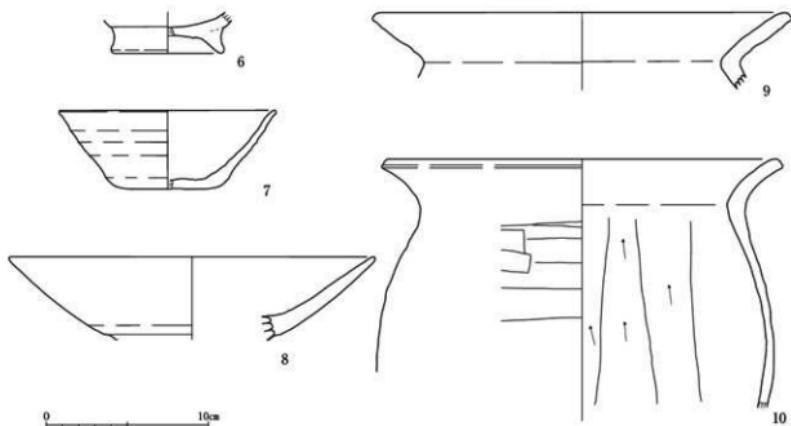
竪穴建物

竪穴建物 1

遺構 調査区の北西端、竪穴建物 2 を切る形で検出された。建物の一部は調査区外へ広がっているため、不明確ではあるが隅丸方形状のプランと想定される。また調査区内で確認できる一辺は2.4mと非常に小規模である。残存状況が非常に悪く、最も残りが良好な部分で掘方底面から0.2m（調査区北壁断面では0.4m）、一部では貼床のみの検出となった。火處は建物の中央南寄りの位置で土器埋設炉が検出された。土器埋設炉は貼床を掘り込んで設置されており、土器と掘方の間隔が広く、形状は緩いU字形を呈する。今塩屋分類V-a類に位置付けられる。



第5図 竪穴建物 1・2 及び土器埋設炉実測図（竪穴建物 S = 1/60・土器埋設炉 S = 1/20）

第6図 竪穴建物1出土遺物実測図 ($S = 1/3$)

柱穴は2基確認されたが、掘り込みが浅くボウル状の断面形を呈していた。これは建物の規模が非常に小さく、上屋構造も軽量になるため、深い掘り込みをもった柱穴が不要であったためと想定される。

遺物 遺物はわずかに残存していた建物埋土と土器埋設炉、土器埋設炉周辺から出土した。

6は土師器高台付椀である。高台と体部の境界が曖昧で、高台は高く外開きの形状となる。竹中編年の6類に位置付けられる。7は土師器壺である。体部は僅かに内湾しながら立ち上がり、口縁端部が若干外側に摘まみだされている。8は土師器高壺の壺部である。脚部を欠損しているため厳密な時期比定は困難であるが、概ね今塩屋・松永編年3~4期と想定される。9は土師器甕口縁部である。頸部が「く」の字状に屈曲し、口縁部は直線的に伸びる。10は土器埋設炉に設置されていた土師器甕である。体部下半は打ち欠かれている。頸部は「く」の字状ではあるが屈曲は緩やかであり、特に外面は明瞭な稜をもたない。口縁部径と体部径がほぼ等しく、今塩屋編年3期に位置付けられる。

図示した遺物の他に内面に布目痕跡をもつ製塙土器片が多数出土したが、細片が多く図化に耐えうるものではなかった。

混入と思われる9の高壺以外の遺物は、9世紀前葉から中葉に位置付けられることから、竪穴建物1は当時期に帰属するものと考えられる。

竪穴建物2

遺構 竪穴建物2は前述のとおり竪穴建物1に切られ、さらに遺構の半分が調査区外に広がっているため不明確な部分も多いが、竪穴建物1よりもさらに小さく、調査区内で確認できる一辺が2.1mしかない。土坑と捉えたほうがよさそうなサイズであるが、床面に貼床が施されていること、床面から壁面への立ち上がり方、方形のプランから竪穴建物と認定した。試掘トレチと重なっているため残存深は0.3m程度であるが、調査区北壁土層断面では0.5m以上あったことが確認できる。柱穴は明確ではなく調査区内では1柱穴のみ検出された。

遺物 遺物は僅かに土師器片が出土したのみで図化できる資料はなかった。

竪穴建物3

遺構 調査区のはば中央で検出された。建物全体に渡って大幅に削平を受けており、竪の下部と貼床、貼床直上層が一部残存していたのみである。竪が住居掘り方の壁よりも大きく突出する形で検出されたが、検出された掘り方の範囲が建物内において貼床を施した部分のみの範囲と想定されるため、本来の竪位置については検討することが不可能である。また竪から1m程南の位置で土器埋設炉が検出された。

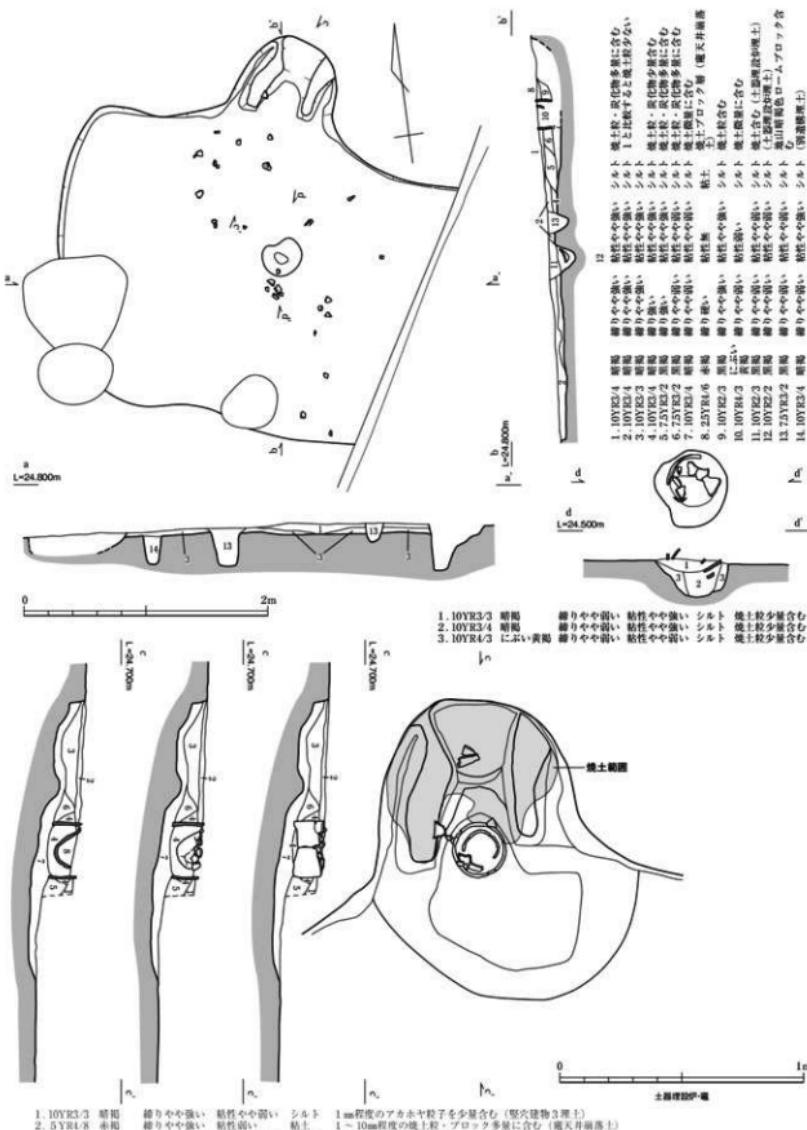
床面は暗褐色ロームを用いて貼床を敷設している。この暗褐色ロームは牛の脛ローム下に堆積するもので、竪穴建物3の掘り方もこの層まで達していることから、建物掘り方を掘削する際に生じた廃土を利用したものと考えられる。ただし貼床上面において明瞭な硬化面は検出されなかった。

竪は建物北側に黄白色の粘土を用いて構築されている。竪の規模は袖の先端から燃焼部奥壁まで0.64m、袖の内法幅は0.32mである。竪の構築方法は、燃焼部を中心にして橢円形状に竪穴建物床面を掘削し、そこに竪構築の基底部となる置土を行い、建物床面に貼床を行う。竪本体はその置土上に構築される。支脚である燃焼部の土師器甕は、その置土と貼床の一部を掘り込み、周囲と内部に粘土混じりの土を詰め込み固定している。土師器甕は直径0.2mの小型の甕の中に、直径0.15mの小型の甕を入子状に配置している。大型のものは口縁部と底部を打ち欠き、小型のものは口縁部を打ち欠いて使用している。この二重の構造により、複数サイズの煮炊具を安定して設置することができたと考えられる。

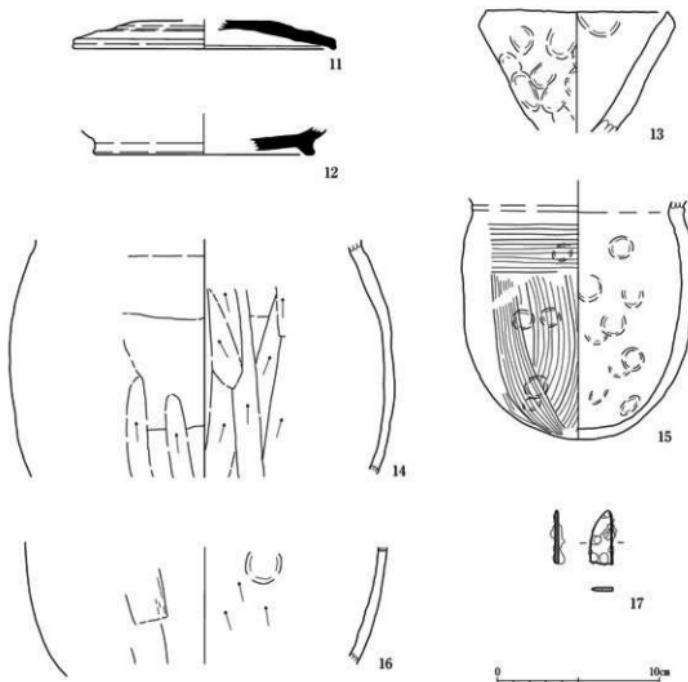
土器埋設炉は直径0.3m、残存深0.15mである。埋設土器の内外から焼土が検出されている。埋設土器は破片化した土師器甕を、径を小さくして組み直して使用するという特異な形態のものである。竪穴建物3は竪を備えているため、炊事場としての機能は竪に譲り、暖を取る施設などに機能が変化している可能性がある。埋設土器内から刀子の先端と思われる鉄製品が出土した。その出土状況から祭祀的な意図が窺える。

遺物 遺物は建物埋土、竪、竪周辺、土器埋設炉から出土している。

11は須恵器壺蓋である。宝珠つまみ部を欠損している。天井部は平坦で途中から斜め下方に屈曲する形態を有する。12は須恵器高台付壺底部である。高台はやや外反する貼り付け高台で底部は中央に向かって落ち込む形態である。いずれも9世紀前半段階に位置付けられる。13は製塙土器である。通常見られる内面の布目痕跡は磨滅のため確認できない。逆三角形状の形態を呈し、外面には指頭圧痕が顕著に見られる。製塙土器はこの他にも細片ではあるが多数出土



第7図 積穴建物3及び竈・土器埋設炉実測図（積穴建物S=1/40 竈・土器埋設炉S=1/20）



第8図 墓穴建物3出土遺物実測図 (S = 1/3)

している。14は土師器壺体部である。壺の二重支脚の外側に設置されていたものである。底部と口縁部を打ち欠いて使用している。体部外面は粘土接合痕をナデ消しているが十分ではないため接合痕が確認できる。内面は下から上方向のヘラケズリが施されている。15は土師器小型壺である。壺の二重支脚の内側に設置されていたものである。口縁部を打ち欠いて使用している。口縁部が完存していても器高は20cmに満たないと想定され、かなり小型の壺と言える。16は土器埋設炉として使用されていた土師器壺体部である。18は土器埋設炉内から出土した刀子である。刃部の大半と茎部を欠損している。

土師器壺は何れも転用する際に口縁部や底部を打ち欠いているため、時期の比定は困難であるが、概ね8世紀後葉から9世紀前葉頃とみられる。須恵器蓋、高台付坏は9世紀前半段階で織まりがあるため、墓穴建物3の時期は9世紀前半と想定される。

堅穴建物 4

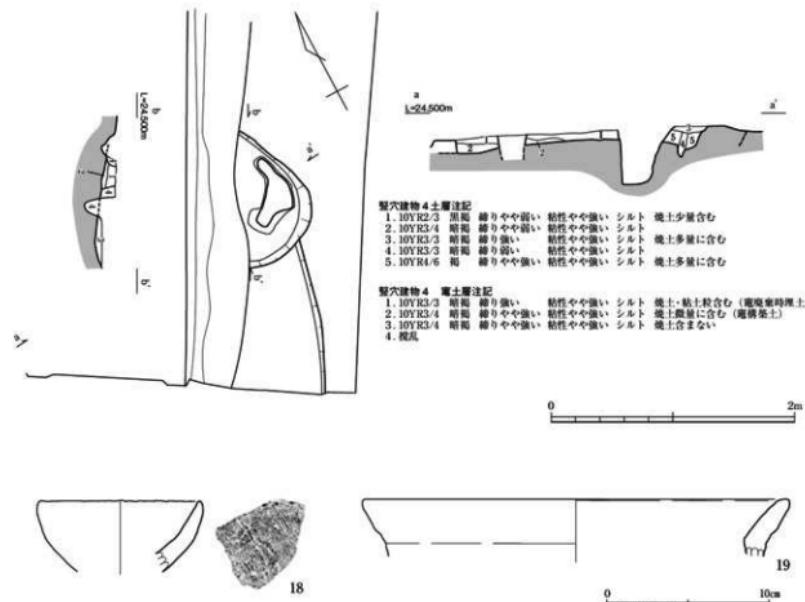
遺構 調査区の南東隅で検出されたが、竈周辺を除いて大部分が削平を受けていた。また竈も溝1によって切られているため、片袖が残存しているのみであった。竈は黄白色粘土を用いて構築されている。

床面は黒褐色、暗褐色ロームを用いて貼床を敷設していたが、貼床上面において明瞭な硬化面は確認されなかった。他の堅穴建物と同様に、貼床として利用されていた両ロームは、建物掘り方を掘削した際の廃土を利用したものと考えられる。

竈は遺存状況が悪いため構築方法の検討は困難であるが、堅穴建物3と同様に掘り込みを設けた後に置土をし、その上に竈本体を構築していると想定される。残存状況が悪いこともあり、支脚は検出されなかった。

遺物 遺構の残存状況を反映して出土した遺物の数量は多いものではなかったが、2点の図化を行った。18は製塩土器である。内面に布目痕跡が確認される。19は土師器壺口縁部である。反転復元を行っているが、残存率が低いため口径が増減する可能性がある。口縁部はやや立ち気味で直線的に伸びる形状である。

両資料共に時期を確定し得るような資料ではないが、概ね8世紀後半から9世紀前半頃におさまるものと想定される。



第9図 堅穴建物4及び出土遺物実測図（遺構S=1/40 遺物S=1/3）

土坑

土坑5

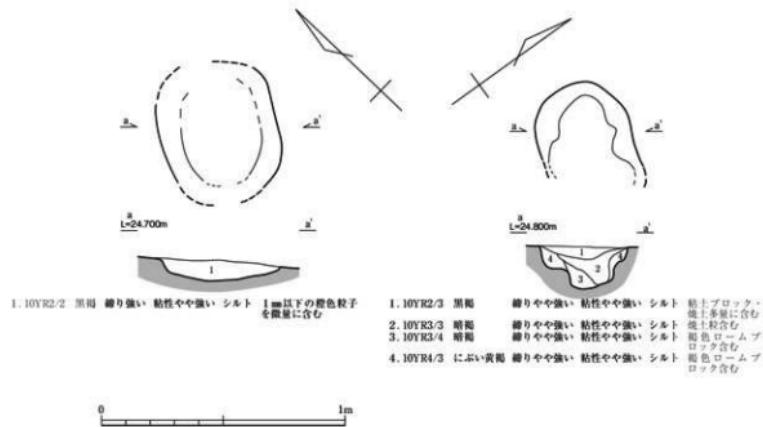
遺構 調査区のはば中央、竪穴建物3と搅乱溝によって南北を切られる形となっている。短軸0.7m、深さ0.13mで黒褐色土の單一層である。平面は梢円形で、断面は浅いボウル状を呈する。

遺物 遺物は出土しなかった。

土坑6

遺構 調査区の北東で搅乱に切られる形で検出された。平面形は残存部分においては梢円形を呈する。横断面は左右共にテラス状の段差が検出され、二段掘りの形状を呈する。短軸0.6m、深さは0.26mを測る。

遺物 土師器片、須恵器片が出土しているが図化に耐えうる資料はなかった。



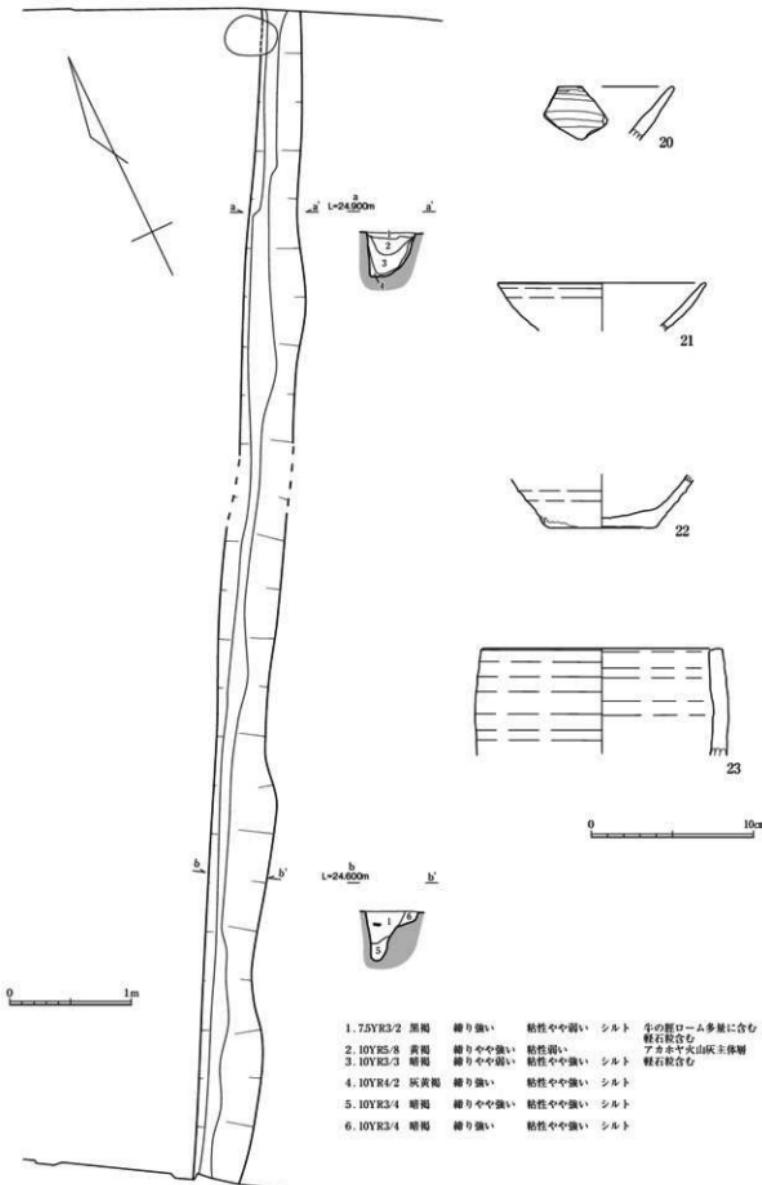
第10図 土坑5・6実測図 (S=1/20)

溝1

遺構 調査区東寄りに位置し、北東から南西方向へ直線的に延びる溝である。横断面形状は西壁が垂直に近い角度になっているが、東壁はスロープ状、もしくはテラスを有する形状となっている。幅は0.4mから0.5mを測り、深さは0.4mを測る。埋土は上層において、牛の脛ロームを主体とする非常に締まりが強い層が検出された。直線的な形状やその断面から区画溝の可能性が指摘できる。

遺物 土師器、須恵器片が出土した。20は黒色土器碗である。内外面共にミガキ調整であるが、内面にのみ炭素を吸着させ、ミガキ調整を施している。21、22は土師器壺である。21は口径が12.4cmと小型で、器高も低い。23は土師器円筒状土器である。体部は直線的に立ち上がり、焼成は土師質ではあるがかなり硬質である。全体の形状や用途は不明である。

破片のため図化は行えなかったが内面に布痕跡をもつ製塙土器が多量に出土している。



第11図 溝1及び出土遺物実測図 (道幅 S = 1/40 遺物 S = 1/3)

4. 中世の遺構・遺物

土坑1

遺構 調査区中央東端で検出された、長軸0.87m、短軸0.67m、深さ0.25mの平面卵形の土坑である。ピットに切られている。1層は高原スコリアと思われる粒子を含んでいる。

遺物 土師器片が出土しているが図化し得る遺物は出土しなかった。

土坑2

遺構 調査区の中央南端で検出された。南側は調査区外へ広がっている。削平が著しく、深さは0.05m程度しか残存していない。平面形は隅丸方形で、調査区内において確認できる短軸と想定される軸は1.2mを測る。

遺物 24は須恵器坏蓋である。25は土師器坏で、磨滅が激しいが底部はヘラ切である。

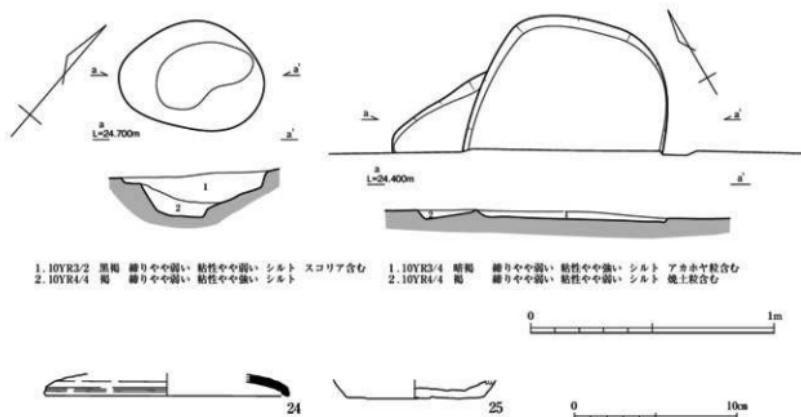
土坑3

遺構 調査区の北西で検出された。北側は搅乱溝に切られているが、平面形は梢円形を呈すると思われる。断面は浅いボウル状に緩やかに立ち上がり、残存深は0.1mである。埋土中に高原スコリアと思われる粒子を含んでいる。

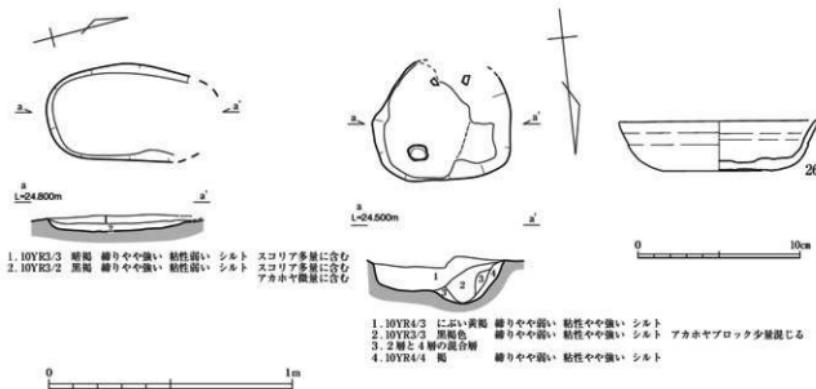
遺物 土師器片、製塙土器が出土しているが図化し得る遺物は出土していない。

土坑4

遺構 調査区中央南寄りで検出され、堅穴建物4を切る形で検出された。平面形はやや歪な円形で直径0.85mを測る。断面は土坑西側が緩やかに立ち上がる形状で古代と思われるピットを切っている。



第12図 土坑1・2及び出土遺物実測図（遺構 S = 1/20 遺物 S = 1/3）

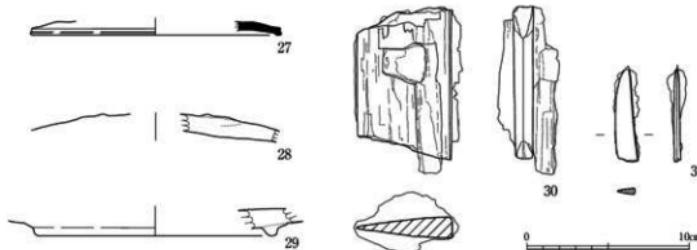


第13図 土坑3・4及び出土遺物実測図（遺構S=1/20 遺物S=1/3）

遺物 26は完形の土師器壺である。底部はヘラ切で体部は口縁部に向かってやや外反しながら伸び、底部から体部にかけての境界は曖昧で丸く立ち上がる。他に中世の土師器片が出土している。

5. その他遺構・遺構外遺物

土器は何れもピットからの出土である。27は須恵器壺蓋でピット27からの出土である。天井部の大部分を欠損しているが、本来は宝珠つまみが付く形態である。28は土師器蓋でピット34からの出土である。須恵器壺、また須恵器模倣の土師器壺と比較しても器壁の厚みが大きいため他の器種の可能性が高い。29は土師器の底部でピット36の出土である。小片ではあるが貼付高台を有する点と器壁厚から盤と想定される。30は搅乱から出土した鉄刀である。鞘の木質が良好に残されている。大部分は欠損しており刃部の一部だけの出土である。刃部幅は3.8cmを測る。31は包含層から出土した刀子である。茎部を欠損している。



第14図 遺構外出土遺物実測図（S=1/3）

第1表 遺物観察表

土器

掲載番号	出土位置	種類 器種	法量(cm)			部位	色調(外) 色調(内)	成形・調整等	外内	胎土
			口径	底径	器高					
第6図6	堅穴建物1 高台付櫛	土師器 高环	—	(6.6)	—		浅黄橙 浅黄橙	横ナデ ナデ	3mm以下の砂粒を含む	
第6図7	堅穴建物1	土師器 环	(13.2)	(4.6)	4.8		浅黄橙 浅黄橙	回転ナデ 回転ナデ	1mm以下の砂粒を僅かに含む	
第6図8	堅穴建物1	土師器 高环	(22.2)	—	—		橙 橙	回転ナデ 回転ナデ	微細な粒子含む	
第6図9	堅穴建物1	土師器 类	(24.4)	—	—		にぶい黄橙 にぶい黄橙	横ナデ 横ナデ	5mm以下の砂粒多量に含む	
第6図10	堅穴建物1	土師器 类	(23.8)	—	—		橙 浅黄	横ナデ 横ナデ後ヘラケズリ	5mm以下の砂粒多量に含む	
第8図11	堅穴建物3 須恵器 环蓋	天井部～口縁 部	(15.8)	—	—	底 部	灰白 灰白	ヘラケズリ・回転ナデ 横ナデ	精良	
第8図12	堅穴建物3 須恵器 高台付环	天井部～口縁 部	(13.3)	—	—	底 部	灰白 灰白	回転ナデ 回転ナデ	精良	
第8図13	堅穴建物3 須恵器 製塙器	口縁～胴部	(11.1)	—	—	横 橙	指オサ工後ナデ 指オサ工後ナデ	1mm以下の砂粒を多量に含む		
第8図14	堅穴建物3	胴部下半	—	—	—	にぶい 灰灰	ナデ	指オサ工後ナデ	3mm以下の砂粒を多量に含む	
第8図15	堅穴建物3	頭部～底部	—	1.3	—	にぶい 黄 にぶい 黄	指オサ工後ハケメ 指オサ工後ナデ	5mm以下の砂粒多量に含む		
第8図16	堅穴建物3	頭部～胴部	—	—	—	やや真 橙	横ナデ後スビナデ 横ナデ後ヘラケズリ	5mm以下の砂粒多量に含む		
第9図18	堅穴建物4 土師器 类	口縁～胴部	(9.6)	—	—	横 橙	ナデ	布目鉄跡	3mm以下の砂粒含む	
第9図19	堅穴建物4 電 类	口縁部	(25.4)	—	—	にぶい 黑 にぶい 黑	横ナデ 横ナデ	3mm以下の砂粒を少量含む		
第11図20	溝1 黑色土器 輪	口縁部	—	—	—	黒・橙 黒	横ミガキ 横ミガキ	微細な粒子含む		
第11図21	溝1 土師器 环	口縁部～体部	(12.4)	—	—	浅黄橙 浅黄橙	回転ナデ 回転ナデ	微細な粒子含む		
第11図22	溝1 土師器 环	体部～底部	—	6.4	—	浅黄橙 浅黄橙	回転ナデ 回転ナデ	微細な粒子含む		
第11図23	溝1 土師器 不明	口縁部～体部	(14.0)	—	—	浅黄橙 浅黄橙	回転ナデ 回転ナデ	1mm以下の砂粒含む 不明		
第12図24	土坑2 須恵器 环蓋	口縁部	(14.9)	—	—	灰黄 灰黄	回転ナデ 回転ナデ	微細な粒子含む		
第12図25	土坑2 土師器 环	体部～底部	—	(5.7)	—	横 橙	回転ナデ 回転ナデ	微細な粒子含む		
第13図26	土坑4 土師器 环	完形	12.1	6.2	3.1	浅黄橙 浅黄橙	回転ナデ 回転ナデ	1mm以下の砂粒含む		
第14図27	ピット27 須恵器 环蓋	口縁部	(15.4)	—	—	灰白 灰	回転ナデ 回転ナデ	精良		
第14図28	ピット34 土師器 类	天井部	—	—	—	浅黄橙 浅黄橙	回転ナデ 回転ナデ	1mm以下の砂粒含む		
第14図29	ピット36 土師器 盤?	底部	—	(14.4)	—	横 橙	回転ナデ 回転ナデ	2mm以下の砂粒を含む		

鉄器

掲載番号	出土位置	器種	法量(cm)			部位	備考
			長さ	幅	厚さ		
第4図1	土坑墓1	刀子	3.9	1.1	0.4	茎	
第4図2	土坑墓1	鉄劍	6.5	0.6	0.4	鍔身～茎	遺存状態悪い 上段①、下段② 長頭劍
第4図3	土坑墓1	鉄劍	5.6	0.6	0.3		
第4図4	土坑墓1	鉄劍	11.3	0.6	0.4	頭～茎	遺存状態悪い 片刃の長頭劍
第4図5	土坑墓1	鉄劍	4.9	3.1	0.2	鍔身～茎	遺存状態悪い 上段①、下段② ②は穿孔有 脳块長三角劍
第14図30	複乱	鉄刀	6.2	5.8	0.8	刃部	
第14図31	包含層	刀子	5.7	1.3	0.3	刃部	

第4節 まとめ

今回の調査は、調査面積が72m²と狭小であったが、竪穴建物4軒、土坑墓1基、土坑6基、溝状遺構1条、ピット48基が確認された。またその中でも竪穴建物4軒、溝状遺構、土坑2基が古代に属するものであり、古代を中心とする遺跡と言える。

調査地は、下北方台地の低位部が高位部へ向かって傾斜を強める屈曲点付近に位置する。古代における下北方台地の中心は、桁行が10mを超え、瓦葺きと想定される大型の掘立柱建物が検出されている下北方塚原第2遺跡であり、現在の景清廟、下北方公民館付近である。そこから花切第1遺跡までは直線距離にして約250mであり、立地上は比較的近接した位置にある。

ここからは前節までの繰り返しになる部分もあるが、以下時系列に沿って主要遺構についての検討をおこないたい。

まず古墳時代の遺構としては土坑墓1が挙げられる。遺存状態は非常に悪いものの、複数の腸状長三角鐵と長頸鐵を有しており土坑墓としては充実した副葬品をもつ。検出当初は、隣接する風倒木によるものとみられる土層転位が竪坑になる地下式横穴墓と想定したが、土層の検討により竪坑ではなく土層転位と判断した。また土坑墓部分も地下式横穴墓の玄室だとすると、検出面がアカホヤ火山灰層直下であるため、天井部をアカホヤ火山灰層中かその上層の黒ボク層中に構築することになり、構造的に困難なものとなる。さらに円墳等、古墳の埋葬施設ではないかとの想定もされるが、調査区内、また調査区の西側は試掘時にトレンチ調査をおこなっているが、そのどちらでも周溝に相当する溝は検出されておらず、これらのことから土坑墓と判断した。土坑墓の床面は北側が南側よりも5cm程度高いことから北頭位とみられ、長頸鐵や腸状鐵は被葬者の腹部付近に配置されていたと考えられる。刀子は被葬者の足元付近で検出されたが、土坑墓を切る搅乱溝床面、土坑墓埋土に貼り付くような状況で検出されたため、搅乱溝の影響を受けている可能性が高い。この土坑墓の時期は、典型的な長頸鐵の副葬と腸状長三角鐵の形状から和田編年V期（TK47併行）、前方後円墳集成8期後半に位置付けられる。この時期の下北方古墳群における首長墓は明確ではないが、若干先行する時期には下北方9号墳の墳丘下に豊富な副葬品をもつ下北方地下式横穴第5号が構築されている。今回確認された土坑墓はこの時期における下位階層の埋葬施設の一様相といえよう。

次に古代の遺構としては竪穴建物が挙げられる。今回の調査では、竪穴建物が4軒確認されたが、そのうち3軒において火廻が確認された。竪穴建物1では土器埋設炉が、竪穴建物3では土器埋設炉と竈が、竪穴建物4では竈が確認され、奇しくも各々が異なる施設を有する状況となった。竪穴建物3、4に関しては削平が激しく、建物全体の形状を想定することは難しいが、竪穴建物1、2は方形を呈する可能性が高い。規模は両者共に1辺が3mにも満たない小型の建物であり、柱穴の断面形状が浅いボウル状を呈し不明瞭という特徴をもつ。特に竪穴建物2に関しては竈や土器埋設炉、焼土面といった火廻ももたないため、作業所などの住居とは異なる用途で利用されていた可能性があるが、それを裏付けるような遺物は出土していない。建物の時期は8世紀後半から9世紀前半と想定され、近接する下北方塚原第2遺跡の大型掘立柱建物の時期が9世紀後半とされていることから、それにやや先行する時期に当たる。この時期の台地中心域の様相が不明瞭なため、直接的に比較、言及はできないが、下北方花切第1遺跡で

は、遺構、遺物共に古代寺院や官衙を想定させるようなものは確認されていないことから、寺院や官衙の関連施設ではなく、それらを支えた一般集落の一端が確認されたものと考えられる。唯一、直線的に伸びる溝1のみが、9世紀前半までに営まれた竪穴建物3、4を切り、9世紀後半まで下る可能性のある内黒の黒色土器を出土していることから、それに関連する区画溝としての性格を有している可能性が指摘できる。

中世の遺構は土坑とピットのみである。ピットは掘立柱建物を構成している可能性もあるが、調査区が狹小なため検出に至っていない。古代と比較すると数は多いものではないが、これらの遺構が確認されることから、下北方花切第1遺跡周辺では中世になっても人々の生活は継続して営まれていたことがわかる。

前述のように、調査地は台地低位部の最奥に位置し、古墳時代・古代共に台地上の中心地からはやや外れた位置に立地する。台地上の歴史を紐解く上では、中心部だけではなくこのような縁辺部の状況も明らかにしていく必要があるが、今回の調査は狭小な面積ながらその一助となったといえよう。ただその狭小さゆえに明らかにできなかった部分も多く、今後の近接地での調査成果に期待したい。

以上、調査成果の羅列に留まってしまった感は否めないがまとめとしたい。

旧石器時代から連綿と人々の生活が営まれた下北方台地は、現代人にとっても住宅地として人気の地域である。先にも記したように今後の調査成果に期待したいが、開発行為に伴うものである場合、その数だけ遺跡が消失していくことに複雑な気持ちは拭えない。

参考文献

- 稻岡洋道編1999 「下郷遺跡」宮崎市文化財調査報告書第41集 宮崎市教育委員会
- 今塩屋毅行2004 「南九州古墳時代の火廻－「土器利用炉」に着目して」「福岡大学考古学論集」－小田富士雄先生退職記念－小田富士雄先生退職記念事業会
- 今塩屋毅行2011 「日向国における古代前期の土師器壺とその様相－時間軸の設定を目指して－」「古文化談義」第65集（3）九州古文化研究会
- 今塩屋毅行・松永幸寿2002 「日向における古墳時代中～後期の土師器－宮崎平野部を中心にして－」「古墳時代中・後期の土師器」第5回九州前方後円墳研究会発表要旨資料集 九州前方後円墳研究会
- 金丸武司編2008 「下北方5号墳周辺遺跡」宮崎市文化財調査報告書第68集 宮崎市教育委員会
- 金丸武司編2009 「下北方下郷第4遺跡」宮崎市文化財調査報告書第74集 宮崎市教育委員会
- 竹中克繁2010 「日向国における古代土器の変遷－宮崎平野部の須恵器・土師器概編年－」「先史学・考古学論究」V 龍田考古会
- 竹中克繁編2008 「下北方1号墳周辺遺跡」宮崎市文化財調査報告書第71集 宮崎市教育委員会
- 西鶴剛広編2010 「下北方塚原第1遺跡」宮崎市文化財調査報告書第78集 宮崎市教育委員会
- 西鶴剛広編2011 「下北方塚原第2遺跡」宮崎市文化財調査報告書第82集 宮崎市教育委員会
- 和田理啓2007 「九州における古墳時代中期の鉄鑄」「九州島における中期古墳の再検討」第10回九州前方後円墳研究会発表要旨資料集 九州前方後円墳研究会

写真図版 1



1. 調査区周辺垂直写真



2. 調査区垂直写真

写真図版2



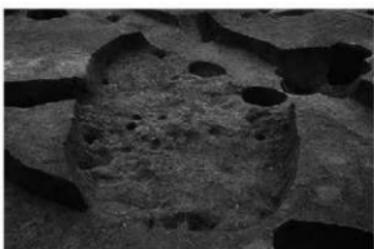
1. 調査終了時写真（南西から）



2. 土坑墓遺物出土状況（北から）



3. 土坑墓遺物出土状況（近接・北から）



4. 土坑墓完掘状況（北から）



5. 土坑墓完掘状況（南西から）

写真図版3



1. 竪穴建物1・2完掘状況（北西から）



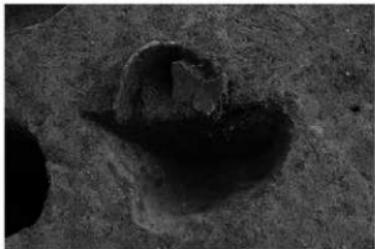
2. 竪穴建物1土器埋設炉（北西から）



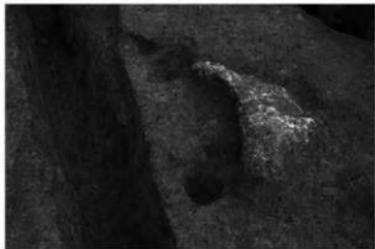
3. 竪穴建物3竈半截状況（西から）



4. 竪穴建物3竈支脚（北西から）



5. 竪穴建物3土器埋設炉半截状況（西から）



6. 竪穴建物4竈（南西から）



7. 土坑5完掘状況（北から）



8. 土坑6完掘状況（東から）

写真図版 4



1. 溝 1 調査状況（南から）



2. 溝 1 土層断面北セクション（南から）



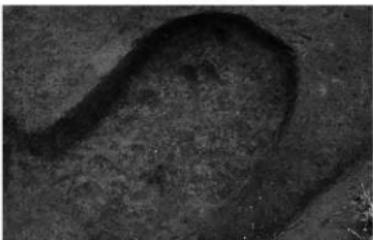
3. 溝 1 土層断面南セクション（南から）



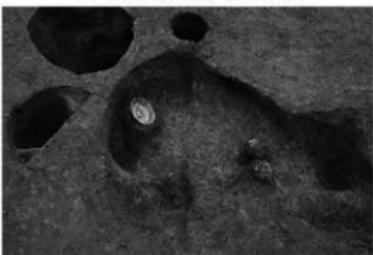
4. 土坑 1 完掘状況（南から）



5. 土坑 2 完掘状況（北東から）



6. 土坑 3 完掘状況（北から）



7. 土坑 4 遺物出土状況（西から）



1. 土坑墓 1 出土鉄製品



2. 穹穴建物 1 出土土器



1. 竪穴建物3出土土器



2. 竪穴建物4出土土器



3. 溝1出土土器



4. 土坑出土土器



6. 遺構外出土遺物



5. 製塙土器片

第Ⅱ章 下北方戸林第1遺跡

第1節 遺跡周辺の環境

1. 地理的環境（第1図）

下北方戸林第1遺跡は、宮崎市街地北西部の下北方町戸林に所在する。当地は平和台公園のある越ヶ牧丘陵から南に派生する下北方台地上にある。台地は宮崎層群を基盤とし、その上位に火山灰土層が堆積して形成されている標高約20から30mの台地で、おおむね平坦な地形をなしている。宮崎平野には、都城盆地周辺を源とし、宮崎平野を貫流後、太平洋へと注ぐ大淀川が流れているが、下北方台地西側はちょうど大淀川がその流れを東から南に変える地点にあたっている。また、台地は東から西にかけて大きく開けており、南に広がる宮崎市街地をはじめ、東に太平洋、西に霧島連山を望むことができる眺望の地である。加えて、大淀川を遡れば都城盆地へ、台地東側の陸路を伝えれば宮崎平野北部方面へ至ることのできる交通の要衝でもある。今回調査をおこなった下北方戸林第1遺跡はこの下北方台地上の西部に位置している。

2. 歴史的環境

下北方台地は宮崎市内唯一の遺跡密集地であり、現在は台地の大部分が一括して「下北方遺跡群」と呼称され、旧石器時代から近現代にいたるまでの数多くの遺跡が残されている。

旧石器時代から縄文時代にかけての遺構・遺物が確認された遺跡は少ないが、剥片尖頭器、三稜尖頭器、縄文土器が検出された下郷遺跡などがある。

弥生時代には、下郷遺跡において環濠集落が形成され、地域の拠点的な役割を担っていたと考えられる。また、台地東側の低地には、弥生時代前期末から中期初めの溝状遺構や河道から木製農具や筌が検出された垣下遺跡がある。

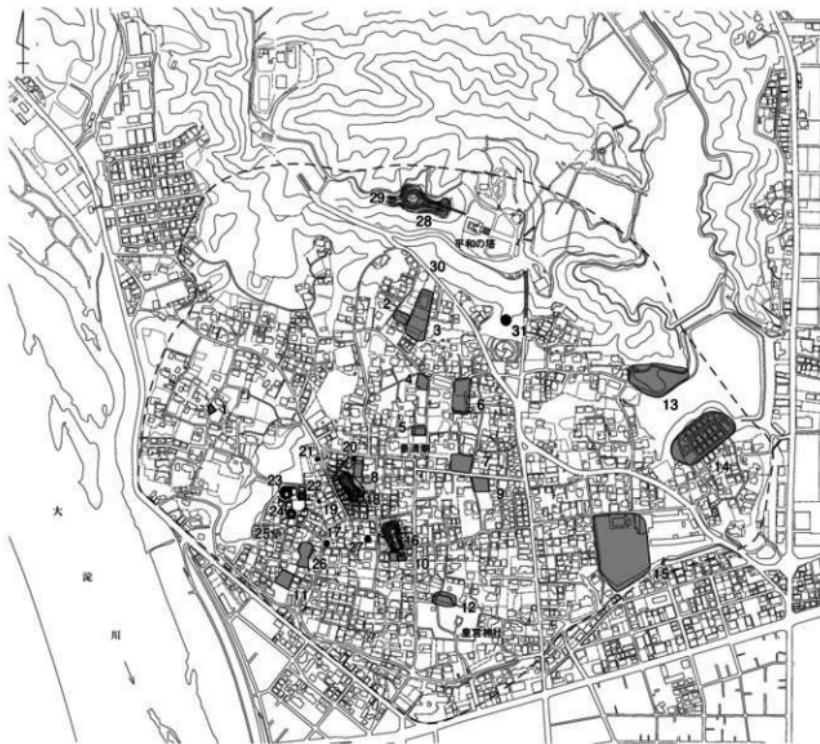
古墳時代前期の様相は不明な部分が多いが、中期以降後期にいたるまで大型古墳を築造する下北方古墳群が形成される。現在、前方後円墳4基、円墳12基、地下式横穴22基が確認されている古墳群である。中でも、下北方地下式横穴第5号から出土した、金製垂飾付耳飾や鉄製武具、武器、馬具などの豊富な副葬品は当地域の古墳時代社会を考える上で極めて重要である。

古代の遺跡には下北方塚原第2遺跡がある。古代寺院跡と思われる大型の掘立柱建物跡が検出された。下北方台地では以前から郡衙や古代寺院の存在が想定されてきたが、その想定を裏付けるものであった。今後宮崎平野部の古代を考えていく上で重要な成果である。近接する下北方下郷第4遺跡においても大型の柱掘方列が検出されており注目される。

中世は不明な部分が多いが、台地北方には宮崎城跡がある。遺存状態の良好な遺構に加えて、城主であった上井覺兼の日記が残されており、当時の様子を詳しく知ることができる。

近世には延岡藩代官所が置かれ、下北方台地が宮崎平野部において政治的な中心地のひとつであったことがわかる。

以上を通観すると、下北方台地上には宮崎平野を代表する多くの遺跡が通時に営まれており、当地域が宮崎平野の歴史を考える上で欠かすことのできない地域であることを示している。



番号	遺跡名	所在地	主な時代	番号	遺跡名	所在地	主な時代	
1	戸林第1遺跡	下北方町戸林	古墳・古代	17	下北方2号墳	下北方町塚原	古墳	
2	花切第1遺跡	下北方町花切	古墳・古代	18	下北方3号墳	下北方町塚原	古墳	
3	花切第2遺跡	下北方町花切	古墳・古代	19	下北方4号墳	下北方町塚原	古墳	
4	下北方塚原第1遺跡	下北方町塚原	古墳・古代	20	下北方5号墳	下北方町塚原	古墳	
5	下北方塚原第2遺跡	下北方町塚原	古墳・古代	21	下北方6号墳	下北方町塚原	古墳	
6	下郷第2遺跡	下北方町下郷	古代・近世	22	下北方7号墳	下北方町塚原	古墳	
7	下郷第3遺跡	下北方町下郷	古墳・古代	23	下北方8号墳	下北方町塚原	古墳	
8	下北方5号墳周辺遺跡	下北方町塚原	古墳・古代	24	下北方9号墳	下北方町塚原	古墳	
9	下郷第4遺跡	下北方町下郷	古墳・古代	25	下北方10号墳	下北方町塚原	古墳	
10	下北方1号墳周辺遺跡	下北方町塚原	古墳・古代	26	下北方11号墳	下北方町塚原	古墳	
11	下北方塚原第3遺跡	下北方町塚原	古墳・近世	27	下北方12号墳	下北方町塚原	古墳	
12	横小路遺跡	下北方町横小路	古墳・古代	28	下北方13号墳	下北方町越ヶ道	古墳	
13	平和台下遺跡	下北方町下郷	不明	29	下北方14号墳	下北方町越ヶ道	古墳	
14	下郷遺跡	下北方町下郷	弥生	30	下北方15号墳	下北方町花切	古墳	
15	大宮中学校校庭遺跡	下北方町横小路	弥生	31	下北方16号墳	下北方町高下	古墳	
16	下北方1号墳	下北方町塚原	古墳	※図中の点線が下北方遺跡群の範囲を示す。				

第1図 周辺の遺跡 (S = 1/10000)

第2節 調査に至る経緯と調査の経過

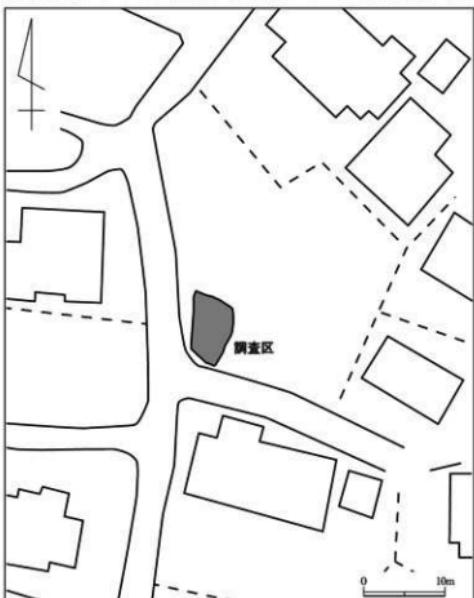
1. 調査に至る経緯

平成22年3月29日、下北方町戸林5288-11における埋蔵文化財所在の有無について照介がなされた。当該地は「下北方遺跡群」の域内にあたるため、平成22年4月21日に埋蔵文化財の有無を確認するための確認調査をおこなった。その結果、ピットなどの遺構や、古墳時代、古代を中心とする土師器、須恵器などが検出された。

そのため、事業者と埋蔵文化財の取り扱いに関する協議を重ねた結果、埋蔵文化財の破壊を避けることはできなかった。そこで、建物建築とともに遺構に影響の及ぶ可能性のある約40m²を対象に本発掘調査を実施することとなった。現地での調査は平成22年8月10日から平成22年8月24日までの期間実施した。現地調査終了後の整理作業については、平成23年4月15日から平成23年6月10日までの期間実施した。

2. 調査の経過

調査地は調査前において畠、草地となっていた。そのため、まずこれらの草木を除去した後、重機によって表土剥ぎ作業をおこなった。調査区内においては大きく搅乱されている部分があり、この時点で近現代において土地の変更がおこなわれていることが推測された。その後、発掘作業員によって、遺物が含まれている近世段階の造成土の掘り下げ作業と、残存している地山上面の検出を行った。この面での遺構検出作業で、いくつかのピットを確認した。そして、これによって検出されたピット覆土の掘削作業を順次おこなっていった。遺構掘削終了後には、調査員による手測り測量や測量機器によって、遺構の形状、土層の状況などを作図することで記録した。また、35mmフィルムカメラ、デジタルカメラを主体とした写真撮影による記録作業もあわせておこなった。記録作業の終了後には、重機によって調査区の埋め戻し作業をおこなって、現地における調査の全てを終了した。これらの作業に加えて、台地上の近隣地に所在する座標既知点から調査地への座標移動作業もおこなった。



第2図 調査区位置図

第3節 調査の成果

1. 調査成果の概要

調査は、調査地のうち建物建築によって遺構に影響が及ぼされる部分について調査区を設定し、おこなった（第3図）。調査面積は38m²である。調査地内は、近現代の搅乱などにより影響を受けている部分が存在したが、いくつかの遺構が検出されたことに加えて、当地の土地利用についての知見を得ることができた。

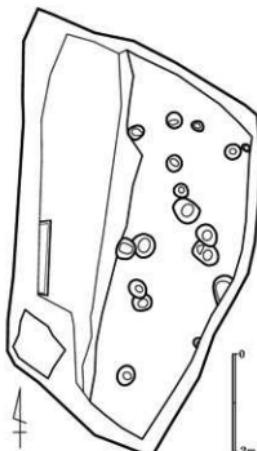
検出された遺構にはピットがある。これらの覆土などから、土師器、須恵器、青磁片などが検出された。また、調査区西半部はローム層上面が硬化しており、道路状遺構の可能性が考えられたが、検出面直上まで搅乱土層が堆積していたことなどから、その可否については判然としない。

2. 土層堆積状況とその解釈

今回調査地では、近現代の搅乱を含めて大きな土地改変がなされていたために、土層の堆積状況が下北方台地上で通常みられる土層堆積状況と大きく異なっていた。下北方台地上では、通常、現地表下に繩文時代から中世にかけての遺物包含層である黒色土層が堆積している。その直下にアカホヤ火山灰層が堆積し、順に牛の脛ローム層、小林軽石粒を含む黒色、暗褐色ローム層がみられ、その下層にAT火山灰層が堆積している。今回調査地近辺ではその下層に姶良深湊火山灰層などを経てアワオコシが堆積していた。今回調査地ではこれらの土層のうち、暗褐色ローム層以上は残存しておらず、搅乱あるいは土地造成にともなうとみられる土層が堆積していた（第4図）。

第4図のうち1は現代の搅乱土である。土師器などの遺物と共にビニールやプラスチックな

どが出土した。2から3層は近世の遺物が出土しており、近世段階での造成土であると判断できる。その直下の4層は3層と同様の特徴をもつ土層で、最下層で地山直上の5層は上層とやや異なる特徴を持つ土層である。この2つの層は掘削段階で遺物が一括して取り上げられているが、その中に近世の瓦片が1点含まれていた。この瓦片が4層、5層のいずれから出土したものか現在では明らかではないため、4層、5層のいずれもが近世段階の造成土であることは4層のみがそうであるのかの判断が難しい。ただし、4層は近世の造成土である2、3層に色調やその他の特徴が類似しており、かつ、5層は色調などが上層と異なっていること、近世段階の遺物を全く含まないピットが掘り込まれていることなどから推定すれば、5層は近世以前の堆積土であると考えられるだろう。ただしこの5層も自然堆積土ではなく、いずれかの時期に土地造成などにともない堆積した土層である。上記ピットの出土遺物に古代以降の土



第3図 調査区平面図

師器片がみられるので、少なくとも古代以降で近世よりも前に堆積したものと判断できる。

この状況からみると、調査地周辺は古代から近世にかけて大きく土地の改変がなされていたことがわかる。また、造成土中に造成時期以前の遺物が多く含まれることや造成土中に焼土、カマド粘土かと思われるような粘土粒が含まれていることから、造成以前には調査地周辺に多くの遺構が存在していたと推定できる。

3. 遺構と遺物

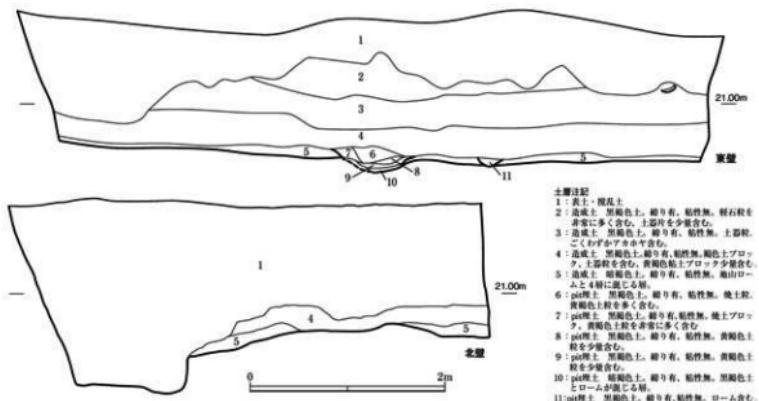
遺構（第3・4図）

ピット 調査区内において17基のピットが検出された。ピットは暗褐色ローム層上面で検出されたが、調査区東壁の土層観察の結果、ピット16、17が5層上面から掘削されていることから、そのほかのピットに関しても5層上面から掘り込まれていると考えてもよいだろう。

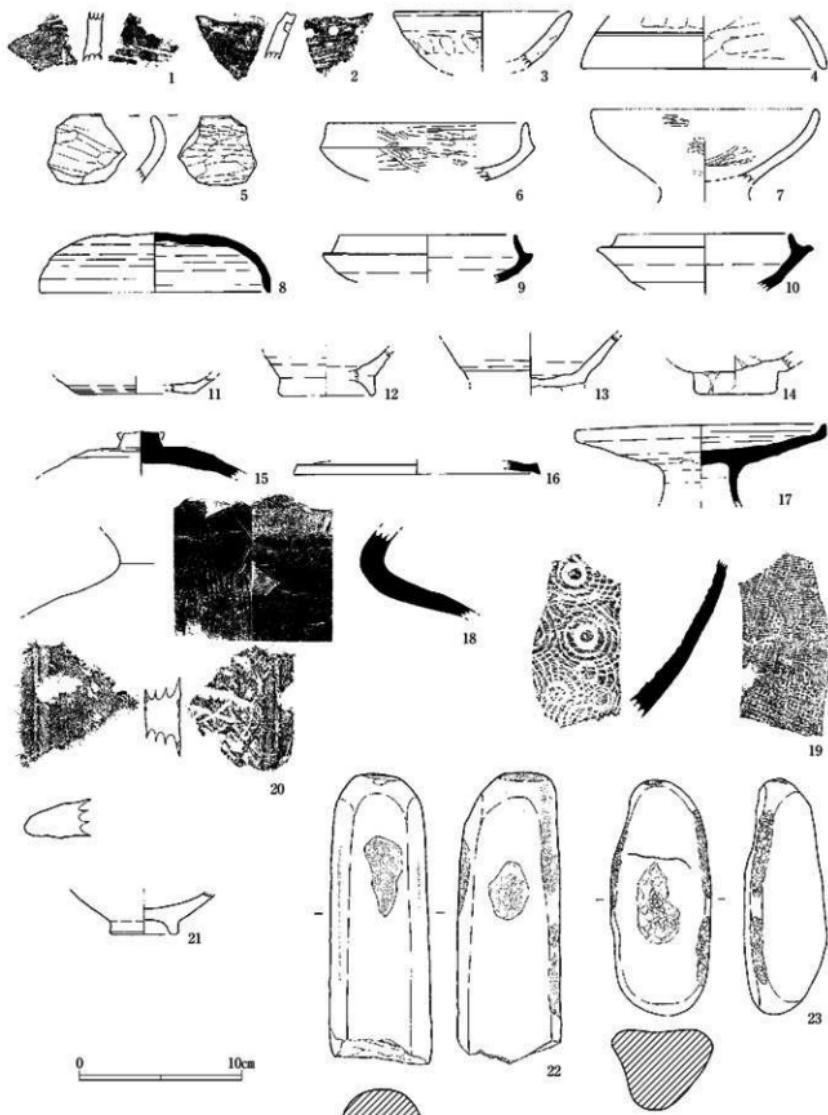
ピットは調査区内東半に散在するように分布しているが、現状で明確に掘立柱建物や柵などの柱列と認められるものは存在しなかった。

遺物 第5図が出土遺物である。図示したものはすべて搅乱、造成土など遺構にともなわない遺物である。ピット覆土からも多少の遺物が出土しているが、小片のため図示していない。

1、2は繩文土器である。1は貝殻腹縁文が施されている。塞ノ神B式土器と考えられる。2には孔列文が施されている。施文には径6mmほどの棒状工具がもちいられているものと思われる。わずかに波打つような口縁形状である。3～7は古墳時代の土師器である。3は壺で、整形が粗雑のために、外面には成形時の粘土紐接合痕跡が認められる。4は須恵器模倣壺の蓋である。扁平で丸みを帯びた形状で、天井部と受部の境界には浅い沈線がめぐらされている。端部は丸く収められており、やや外反している。5・6は須恵器模倣壺の身である。5は口縁付近の破片で、端部が丸く収められ、内側に屈曲する口縁部形状である。6は口縁部から胴部にかけての破片で、底部に向かってやや器厚が増している。内外面にミガキ調整がみられ



第4図 調査区壁面土層断面図



第5図 出土遺物実測図

る。7は高坏で、脚部を欠損している。身の形状は塊形で、外方に向かって緩やかに内湾しながら立ち上がっている。口縁部付近では屈曲の角度がやや急になり、口縁端部は丸く収められている。8~10は古墳時代の須恵器である。8は坏蓋である。全体に丸みを帯びた形状で、天井部と口縁部境界の稜、沈線とともに確認できない。天井部の回転ヘラケズリは広い範囲に施されているが粗雑な印象を受ける。口縁端部は丸くやや膨らんでいる。9は坏身である。全体的に扁平な器形である。受部の立ち上がりは内傾しており、口縁端部付近はわずかに外方へ屈曲している。10は坏身である。丸みを帯びた器形である。受部立ち上がりは短く内傾し、端部は丸く収められている。回転ヘラケズリの幅は広く粗雑な印象を受ける。11から14は古代の土師器である。11は坏でヘラ切底である。12、13は高台付の坏である。12の高台は先端部に平坦面がみられる。13は高台部分が剥離している。外方に向かって直線的に開く器形である。14は土師器壺である。下方に短く突出した底部形態で、底部底面には木葉痕が残されている。15から19は古代の須恵器である。15は坏蓋で、厚みがあり、天井部のつまみはわざと打ち欠かれている。16は坏蓋である。扁平な器形である。17は高坏である。受部は浅く、口縁端部はわずかに外方にむかって立ち上がっている。内面は平滑で転用窓の可能性がある。18は壺である。肩部の破片で外面に平行タタキ目がみられる。内面は平滑にナデられている。19は壺の胴部である。外面に格子目タタキ、内面に同心円当具痕がみられる。20は古代瓦である。平瓦で側縁の一部が残存している。21は中世の青磁碗である。小振りな高台が取り付けられている。22、23は敲石である。ともに砂岩製で、全面に敲打痕が認められる。部分的に被熱している部分や、錫が付着している部分がみられ、金属製品の加工工具であると考えられる。

第1表 遺物観察表

番号	出土状況	種類	器種	部位	量			調査		點数	備考
					①	②	③	外面	内面		
1	3期	陶文土器	深鉢	脚部	—	—	—	ナデ	ナデ	1	陶文土器、黒色較わざか含む
2	鏡瓦	陶文土器	深	口縁部	—	—	—	ナデ	ナデ	2	—2mmの右斜材含む 鏡瓦残片、孔列土器
3	鏡瓦	土師器	坪	口縁部~脚部	(87)	—	—	横ナデ・脚ナデ	横ナデ	3	茎母材を含む 6世紀後半(TK43~209号地)
4	4~5期	土師器	横幅広基	口縁部~脚部	(15.0)	—	—	ナデ・手持ちヘラケズリ	ナデ	4	茎具、—1mの赤・黒・白斜材含む 6世紀後半(TK43~209号地)
5	4~5期	土師器	横幅身	口縁部	—	—	—	ヒガキ	ヒガキ	5	横幅、—1mの赤・黒・白斜材含む 7世紀前半(TKG17型式期)
6	3期	土師器	横幅身	口縁部~脚部	(12.2)	—	—	ヒガキ	ヒガキ	6	横幅、—2mmの赤・黒・白斜材含む 6世紀後半(TK43~209号地)
7	3期	土師器	高坪	口縁部~受部	(13.6)	—	—	ヒガキ	ヒガキ	7	横幅、—2mmの赤・黒・白斜材含む 6世紀後半(TK43~209号地)
8	表探	須恵器	坏蓋	口縁部~天井部	35	(14.2)	—	回転ナデ・回転ヘラケズリ	回転ナデ	8	回転ナデ、—2mmの左斜材、右斜材 7世紀後半(TKG17型式期)
9	鏡瓦	須恵器	坏身	口縁部~脚部	(10.0)	—	—	回転ナデ・回転ヘラケズリ	回転ナデ	9	回転ナデ、—1mmの黒・白斜材含む 6世紀後半(TKG17型式期)
10	鏡瓦	須恵器	坏身	口縁部~脚部	(10.6)	—	—	回転ナデ・回転ヘラケズリ	回転ナデ	10	回転ナデ、—2mmの黒・白斜材含む 6世紀後半(TKG17型式期)
11	鏡瓦	土師器	坪	底部	—	—	(7.0)	回転ナデ	回転ナデ	11	鏡瓦、ごく後に赤斜材含む 古代、底面へラ切
12	3期	土師器	高台坪	底部~脚部	—	(6.0)	—	回転ナデ	回転ナデ	12	鏡瓦、ごく後に赤・赤斜材含む 9世紀代?
13	4~5期	土師器	高台坪	脚部	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	13	鏡瓦、—1mの黒・白斜材含む 8世紀後半、内壁剥り着
14	表土	土師器	裏	底部	—	(5.0)	—	脚ナデ・ナデ	ナデ	14	鏡瓦、—1mの赤斜材含む 古代、底面本素面
15	鏡瓦	須恵器	坏蓋	天井部	—	—	—	回転ナデ・回転ヘラケズリ	横ナデ・仕上げナデ	15	鏡瓦、—2mmの黒斜材含む 8世紀前半、内面重ね焼き痕跡
16	鏡瓦	須恵器	坏蓋	口縁部	—	(13.0)	—	回転ナデ	回転ナデ	16	鏡瓦、—1mの白斜材含む 8世紀代
17	2期	須恵器	高坪	口縁部~脚部	(15.2)	—	—	回転ナデ	回転ナデ・仕上げナデ	17	鏡瓦、—1m以下の白斜材含む 8世紀前半、転用窓?
18	表探	須恵器	裏	脚部~底部	—	—	—	横ナデ・平行タタキ	ナデ	18	鏡瓦、白、黒の繊細な斜材含む 古代、12瓣圓底内腹に赤手引、白斜材
19	鏡瓦	須恵器	裏	脚部	—	—	—	筋子ナタキ・カキメ	同心円当具痕	19	鏡瓦、白、黒の繊細な斜材含む 古代
20	鏡瓦	瓦	瓦	脚縫部	—	—	—	筋子ナタキ・タテナキ	筋瓦、—2mmの移動材を含む 8世紀前半?	20	鏡瓦、筋瓦、筋瓦に引け目、筋打痕跡
21	4~5期	青磁	鏡	脚部~脚部	—	—	29	青磁	青磁	21	見出三尾ハマ
22	4~5期	石器	砾石	砂質	17.3	6.3	6.2	重さ1280g、被熱による赤化、鏡打痕跡	筋瓦	22	青磁、表面に焼け目、鏡打痕跡
23	4~5期	石器	砾石	砂質	14.3	6.2	5.1	重さ650g、表面に焼け目、鏡打痕跡	筋瓦	23	青磁、表面に焼け目、鏡打痕跡

※法量は土器の場合①が高さ、②が口径、③が底径を、石器の場合①が長さ、②が幅、③が厚さを示す。()付のものは復元量。

第4節 まとめ

今回の調査は調査面積が狭小であることなどもあり、検出された遺構、遺物の量はさほど多くはなかった。検出された遺構にはピットがあるが、覆土から出土した遺物から、古代～中世にかけてのものと考えられた。また、今回の調査で、下北方台地上における土地利用の在り方の一端をうかがうことができた。すなわち、古代から近世の土地造成痕跡を確認できたことである。今回調査地においては、土層の観察などから古代から中世にかけてのある時期と近世段階に大規模な土地改変がおこなわれていたことがわかった。近世段階の土地改変の痕跡は近隣でおこなわれた確認調査時にも認められており、この土地改変が広範囲に及ぶ大規模なものであったことが考えられる。

下北方台地は開析谷が存在しており、それによって地形上、東西に分けることができる。今回調査がおこなわれたのはその西側にあたる。台地西側にはいくつかの箇所にある程度の面積をもった平坦な土地が存在しているが、これらはこうした土地改変によって人為的に造作されたものとの想定ができる。現状において、台地東側には大規模な土地改変の痕跡は確認されておらず、土地改変は開析谷を挟んだ台地東側には及んでいなかった可能性がある。下北方台地上におけるこうした土地改変がどの時期に、どのような目的をもって、どのような規模、範囲でおこなわれていたのか、今後の調査などで情報を蓄積していく必要がある。

参考文献

- 金丸武司編2008 「下北方5号墳周辺遺跡」宮崎市文化財調査報告書第68集 宮崎市教育委員会
- 金丸武司編2009 「下北方下部第4遺跡」宮崎市文化財調査報告書第74集 宮崎市教育委員会
- 竹中克繁編2008 「下北方1号墳周辺遺跡」宮崎市文化財調査報告書第71集 宮崎市教育委員会
- 西嶋剛広編2010 「下北方塚原第1遺跡」宮崎市文化財発掘調査報告書第78集 宮崎市教育委員会
- 西嶋剛広編2011 「下北方塚原第2遺跡」宮崎市文化財発掘調査報告書第82集 宮崎市教育委員会
- 宮崎県編1998 「宮崎県史 通史編」 宮崎県

写真図版 1



調査区全景（北から）



調査区全景（南から）

写真図版2



調査区北壁（南から）



調査区東壁（西から）



調査区西壁（東から）

写真図版3

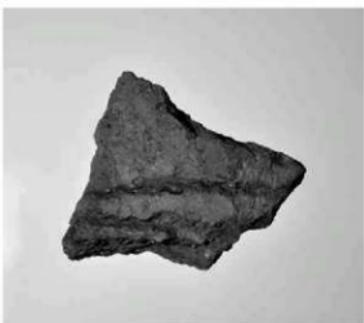


出土遺物1（古墳時代）



出土遺物2（古代）

写真図版4



上左：孔列文土器

上右：塞ノ神式土器

下：青磁碗



磁石

第三章 弓袋第2遺跡

第1節 遺跡周辺の環境

1. 地理的環境

弓袋第2遺跡は宮崎市北西部の宮崎市高岡町内山字弓袋に位置する。遺跡が所在する高岡町域は山林がその大部分を占めている。この山林の間を縫うように宮崎平野を貫流する大淀川や、その支流である飯田川、瓜田川等が流れているが、これら河川沿いに狭い沖積地が発達している。また、沖積地以外にも河岸段丘が形成されていて、この沖積地や河岸段丘上には集落が営まれている。沖積地のうち最も広い面積を有する大淀川と飯田川の合流地点周辺は現在の高岡町中心市街地になっている。弓袋第2遺跡はその沖積地の西端付近にあたり、北の高岡山地から南の大淀川へ向かって突き出した舌状の丘陵上に位置している。遺跡周辺の標高は約70mである。

2. 歴史的環境

高岡町域には数多くの遺跡が存在し、その多くは河岸段丘上に営まれている。また、数は少ないながらも、沖積地においても各時代の遺跡が確認されている。

旧石器時代の遺跡にはAT火山灰層下層からラウンドスクレイバーが出土した高野原遺跡や、AT火山灰層上層で集石遺構やナイフ形石器が出土した向屋敷遺跡などがある。小田元第2遺跡では、細石刃や細石核、角錐状石器、ナイフ形石器、剥片尖頭器が出土した。また、国府型ナイフ形石器が小田元第2遺跡、押田遺跡から出土している。

繩文時代の遺跡が多い。早期の天ヶ城跡では押型文土器、桑ノ丸式土器が、永迫第2遺跡では轟1式土器とともに玦状耳飾が出土した。高野原遺跡では陥穴状遺構が検出された。前期の久木野遺跡などからは轟B式土器、曾畠式土器が出土している。中期の去川山下遺跡、久木野遺跡では春日式土器が確認された。後期の遺跡も多く、橋山第1遺跡からは阿高系土器、疑似繩文土器が、城ヶ峰遺跡では北久根山式土器が出土し、久木野遺跡では円形竪穴住居跡が確認された。晩期の学頭遺跡からは黒色磨研土器、糸魚川産ヒスイ製の勾玉が出土した。

弥生時代遺跡の調査例は少なく、その様相は明らかでない。上記の学頭遺跡で、断面V字形の溝状遺構や、竪穴住居跡、的野遺跡からは溝状遺構、土坑墓が、丹後堀遺跡からは竪穴住居跡が確認されている。

古墳時代遺跡も調査例がさほど多くはないが、沖積地上にある高岡麓遺跡第5地点、八見遺跡で住居跡が確認された。また、墳墓については、久木野地下式横穴墓群、高岡町古墳がある。久木野地下式横穴墓群では4基の調査がおこなわれ、鉄斧や玉類が出土した。6世紀前半に位置付けられる。高岡町古墳ではその周辺から耕作中に壺と鉄製品が出土している。

古代には高岡周辺は「穆佐郷」と呼ばれていた。この時期の遺跡には、9世紀後半の土師器焼成土坑が6基以上検出された蕨野遺跡、越州窯青磁碗や灰釉陶器皿、緑釉陶器皿が多く出土した三生江遺跡、的野遺跡などのほか、平面コの字形で断面V字状の溝が検出された三万田遺跡などが知られている。



第1図 周辺の遺跡 (S = 1 : 25000)

中世の高岡周辺は島津氏と伊東氏の争いの舞台となる。この時期の中心となったのは穆佐城周辺である。穆佐城は宮崎県内でも最も古い山城の一つで、巨大な堀切によって大きく4つの区画に区分された、南九州に特徴的な館屋敷型城郭である。継続的な調査がおこなわれており、次第にその姿が明らかになりつつある。

近世になると、高岡の中心地は穆佐郷から高岡郷へと変わっていく。天ヶ城のある高岡郷は穆佐城のある穆佐郷と同様、薩摩藩の関外四ヶ郷として発展した。中でも高岡郷はその中心として発展し、天ヶ城の裾に麓が形成され、多くの郷士が居住していた。この麓が高岡麓遺跡である。高岡麓遺跡は高岡郷の地頭仮屋を中心とする遺跡で、計画的な街路設計がなされ、郷士屋敷群、町屋群に区分されている。この遺跡は現在の高岡町中心市街地にあたっていることもあり、これまで33の地点で調査がおこなわれている。本調査がなされたのはこのうちの12の地点であるが、これらの調査で18世紀後半の整地層や火災の焼土層、井戸遺構など近世段階の遺構や、それにともなう遺物が多く確認されている。

第2節 調査に至る経緯と調査の経過

1. 調査に至る経緯

平成22年度に、埋蔵文化財所在の有無について照会がなされた、宮崎市高岡町内山弓袋1650は、周知の埋蔵文化財包蔵地外ではあったが、中世の石塔や近世の墓石が分布していること、周辺に周知の埋蔵文化財包蔵地である「弓袋遺跡」が所在していることなどから、当地にも埋蔵文化財が存在する可能性があったため、平成22年7月8日から平成22年8月9日にかけて試掘調査を実施した。その結果、石塔の下部構造が残存していることや、土坑などの遺構が確認された。

そのため、事業者と埋蔵文化財の取り扱いに関する協議をおこなったが、事業にともなう埋蔵文化財への影響を避けることはできなかった。そこで、事業にともなって遺構に影響が及ぶ約234m²を対象に本発掘調査を実施することとなった。現地での調査は平成22年11月15日から平成22年12月22日までの期間実施した。現地調査終了後の整理作業については、平成23年4月20日から平成23年6月10日までの期間実施した。

2. 調査の経過

調査地は山林の中の細い丘陵上に位置していたために、重機の搬入が困難であった。そのため、表土剥ぎ作業は木の根などに悩まされながら、発掘作業員の人力によっておこなった。また、一部の立木の伐採作業なども合わせておこなった。加えて、調査地内に現存していた石塔は、調査前の状況写真を撮影した。その後、表土剥ぎを終えた調査区全体の精査をおこない、遺構検出作業をおこなった。検出された遺構から順次掘り下げをおこなった。掘削が進んだ遺構については調査員による手測り、測量機器による計測や、35mmフィルムカメラを主体とする写真撮影により記録作業をおこなった。また、中世石塔やその下部において検出された礫敷部の実測や測量などに関しては業務委託をおこなった。これらの記録作業終了の後には、サブトレンチなど深く掘り下がった部分について埋め戻しをおこない、現地での作業を終了した。

第3節 調査の成果

1. 調査成果の概要（第2図）

調査区は調査地内のうち、試掘調査において遺構があると判断された部分、すなわち、石塔が立っていた周辺と、その南側にある平坦面との2箇所に設定した。南北方向に並ぶ、2つの調査区のうち北側を北区、南側を南区と呼称している。

調査の結果、調査地は中世の墓域であったことが明らかになり、現地に立っていた中世石塔の下部構造の一部や、その隣に残されていた石塔据置のための下部構造のみが残存していた部分、100枚以上の洪武通宝が出土した土坑墓が確認された。その他にも石塔設置用あるいは集石墓の可能性がある集石遺構や土坑なども確認されている。これらの遺構群は当地域の中世墓を検討する上で有益な調査例となるだろう。

中世以外の遺構は確認されなかったが、旧石器時代のスクレイバーや剥片、縄文土器片が出土しており、中世の墓域形成以前の調査地の有様を知る手がかりとなる。

2. 遺構と遺物

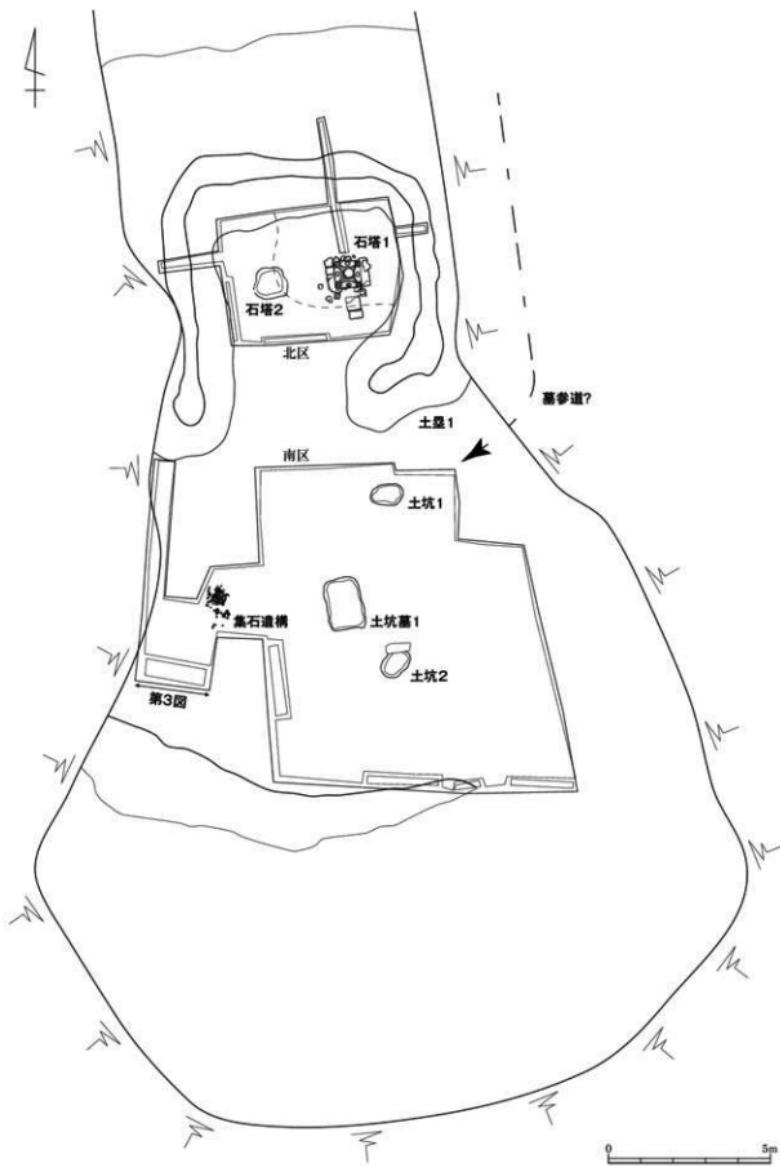
調査地の地形と土地造成の痕跡

第3図は南区南壁の土層断面図である。図右側が、ちょうど尾根の落ち際付近にあたっている。図中の5から7層は地山層であるが、これらの層は地形の傾斜に合わせて西方向に傾斜していることがわかる。しかし、その上層の4層の堆積状況は水平であり、5から7層とは異なる堆積のありかたを示している。このことは4層が何らかの人為的作業によって堆積したことを見ているものと思われる。

4層は、今回調査地の全体に堆積している土層で、層中には旧石器時代、縄文時代、中世の遺物が含まれていた。それより新しい時期の遺物は含まれていない。また、今回確認された各遺構は、この4層上面から掘り込まれていることも確認された。したがって、4層の堆積時期は、中世段階でも遺構が構築される以前であることが確認できる。

調査地は中世の墓域であった場所であるが、前述のとおり、現状においてもかなり幅の狭い痩せ尾根上にあたる。南区南壁の土層堆積状況や、旧地形の把握を目的として調査区内で丘陵に直交するように設定したサブトレーナーでの調査結果からみて、当地は本来現況よりさらに幅の狭い尾根であったことが推測された。したがって、当地に墓域を形成するためには、ある程度土地を造成し、一定程度の面積を持った平坦面を作出することが必要であったのかもしれない。つまり、調査地全体に堆積している4層は、今回確認された中世の墓域を形成するための平坦面作出を目的とする土地造成の際に堆積した造成土であると考えるのが最も妥当であると思われる。

また、調査地がある丘陵は調査区のある平坦面から急傾斜で落ちており、周囲からこの丘陵を上ってくることは困難である。しかし、東斜面には東側の追から墓域のある平坦面向かって、等高線を斜めに横切るように緩やかに上る小道が存在している。この小道がいつの時代に作られたものかについては判然としないが、今回確認された墓への参道であった可能性も考えられる。



第2図 調査区平面図

石塔

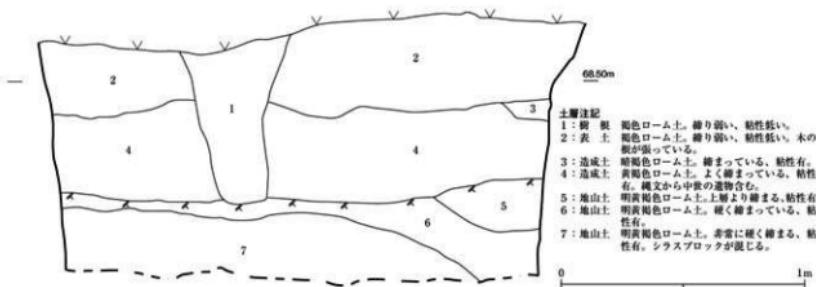
石塔1（第4～6図）

調査地に以前から立っていた石塔で、調査地周辺に存在していたと言われる内山城主野村備中守文綱の墓との伝承があるがその真偽は定かではない。塔身が方形で相輪をもつ、いわゆる伊東塔である。高さは162cmで相輪の宝珠と露盤、笠部の屋根流れと軒側面、塔身、地輪にそれぞれ、南無阿弥陀佛の一文字が刻まれている。

相輪は高さ77cmで露盤の一部が欠損している。宝珠部分は扁平な形で、頂部にはわずかな突起が認められる。正面下寄りに「南」字が刻まれている。上部の請花は浮彫で15個の蓮花が彫られている。花弁の数は基本的に5花弁であるが、正面の蓮花から時計回りに8、12個目の中には7花弁になっている。また、各蓮花の中央花弁には割り付けのためのものと思われる細い沈線が縦に刻まれている。宝珠部分との境界に明瞭な段差ではなく、浅い溝によって区画されている。本例には伏鉢ではなく、請花が直接相輪に接している。相輪は7段で、幅26cmである。明瞭な角をもって作りだされており、精美な印象を受ける。下部の請花も上部請花同様で、覆鉢は省略され、相輪に直接接続し、蓮花が浮き彫りにされている。蓮花の数は12個で、花弁の数は5花弁であるが、正面から時計回りに3個目の蓮花のみ3花弁になっている。上部請花同様の割り付け線も認められる。露盤は方柱状で1辺27cm、高さ12cmである。露盤側面の4面は縁辺付近に細い線刻で縁取りがなされている。また、すべての側面中央付近には雲形格狭間が彫られていて、正面の格狭間には「無」字が刻まれている。脚部は下部がすぼまる柱状で、側面觀は逆台形状になり、高さ7cmである。

火輪は1辺77cm、高さ35cmで方形屋根の頂部に相輪を据えるための平坦面が作り出されたような形態である。平坦面中央には相輪脚部を挿入するための方形の納穴がある。軒先線を側面から見たラインは中央がへこむ形で大きく湾曲している。また、隅棟頂部の角が面取りされており、狭い平坦面が作り出されている。底面には垂木が表現されていて、地垂木、飛擔垂木のある二軒構造となっている。屋根流れの四面には雲形格狭間、線刻による装飾がなされており、正面の雲形格狭間中央には「阿」字が刻まれている。軒側面中央には「弥」字が刻まれている。

塔身は1辺約33cmの直方体で各縁辺付近に欠損が目立つ。正面と左右側面のみ線刻で飾られ



第3図 南区南壁土層断面図

ており、その下辺中央には線刻によって蓮花が描かれているが、右側面の蓮花のみ花弁を示すと思われる線刻が省略されている。塔身正面中央上寄りには「陀」字が刻まれている。また、「時天正十三年乙酉 漢阿弥陀佛 十二月十日敬白」の文字が刻まれている。塔身上面と下面には線刻で「×」印が刻まれている。製作あるいは設置に関わる目印のようにも思われるが、その性格は判然としない。

地輪は1辺77cm、高さ23cmである。各側面の上辺には蓮花が浮き彫りにされている。蓮花は、四隅に各1個、右辺に6個、その他の辺に各5個が浮き彫りにされおり、合計25個である。各花の形状をみると、花弁数は3から8花弁とばらつきがあることや、請花などに見られた割り付け線がほとんどみられないこと、蓮花形態が一定でないことなどから、粗雑な製作の様子がうかがえる。また、各辺で花弁のふくらみなどの形状も異なり、複数の工人によって製作された可能性が指摘できる。台座上面は平坦で、塔身の受部などはない。また、側面に「佛」字が刻まれているが、後述する搅乱時の据え直しによって、調査時には塔の背面側になっていた。

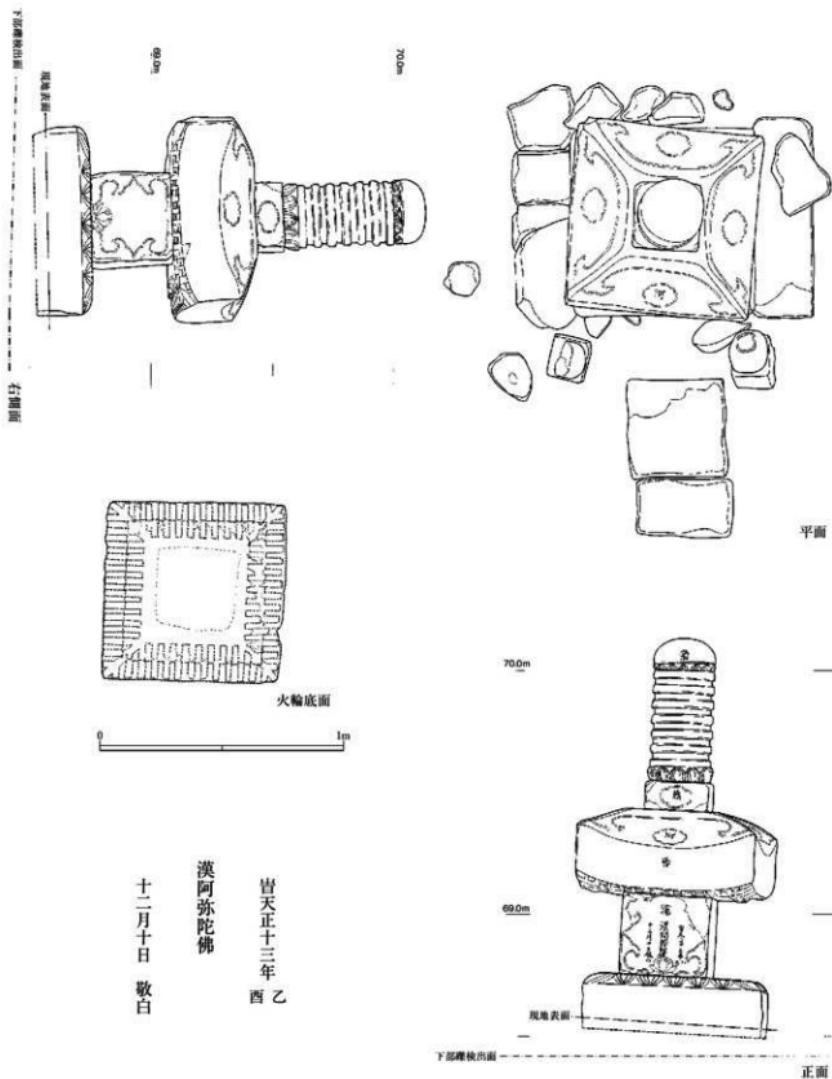
石塔地輪の周囲には地輪を固定するためかと思われる石材が並べられていた。石材には凝灰岩と砂岩がある。凝灰岩のものは、整った形状で、本来的に石塔にともなう石材であると考えられるが、砂岩は石材が異なることや、不整形な形状であることなどから、本来的には石塔にともなうものではない可能性もある。

石塔の実測後、下部構造を確認するために石塔を移動し、掘り下げをおこなった。まずは、下部の様相を把握するためのサブトレーナーを設定し掘り下げた。その結果、大小2つの土坑が切り合って存在することが確認された。そのうち、石塔地輪の直下辺りにあった小型で円形の土坑は、掘った穴を一時に埋め戻したような堆積状況で、棺を設置していたような土層堆積ではないことや、土坑中位付近に五輪塔の火輪が逆位で投げ込まれたような状況で検出されたことなどから、搅乱坑であると判断された。石塔下で確認された土坑のうち今ひとつは、石塔設置時に掘削されたものであろう土坑と考えられる。中央部分を搅乱坑に破壊されてはいたが、全体の形態などは把握することができた。楕円形の土坑で、規模は東西200cm、南北271cm、深さ20cmである。埋土中に多量の小礫が含まれていた。このことからこの土坑はおそらく地山層や造成土層が軟弱であることに起因した、石塔の設置にあたっての基礎構築を意図しての製作であると考えられる。

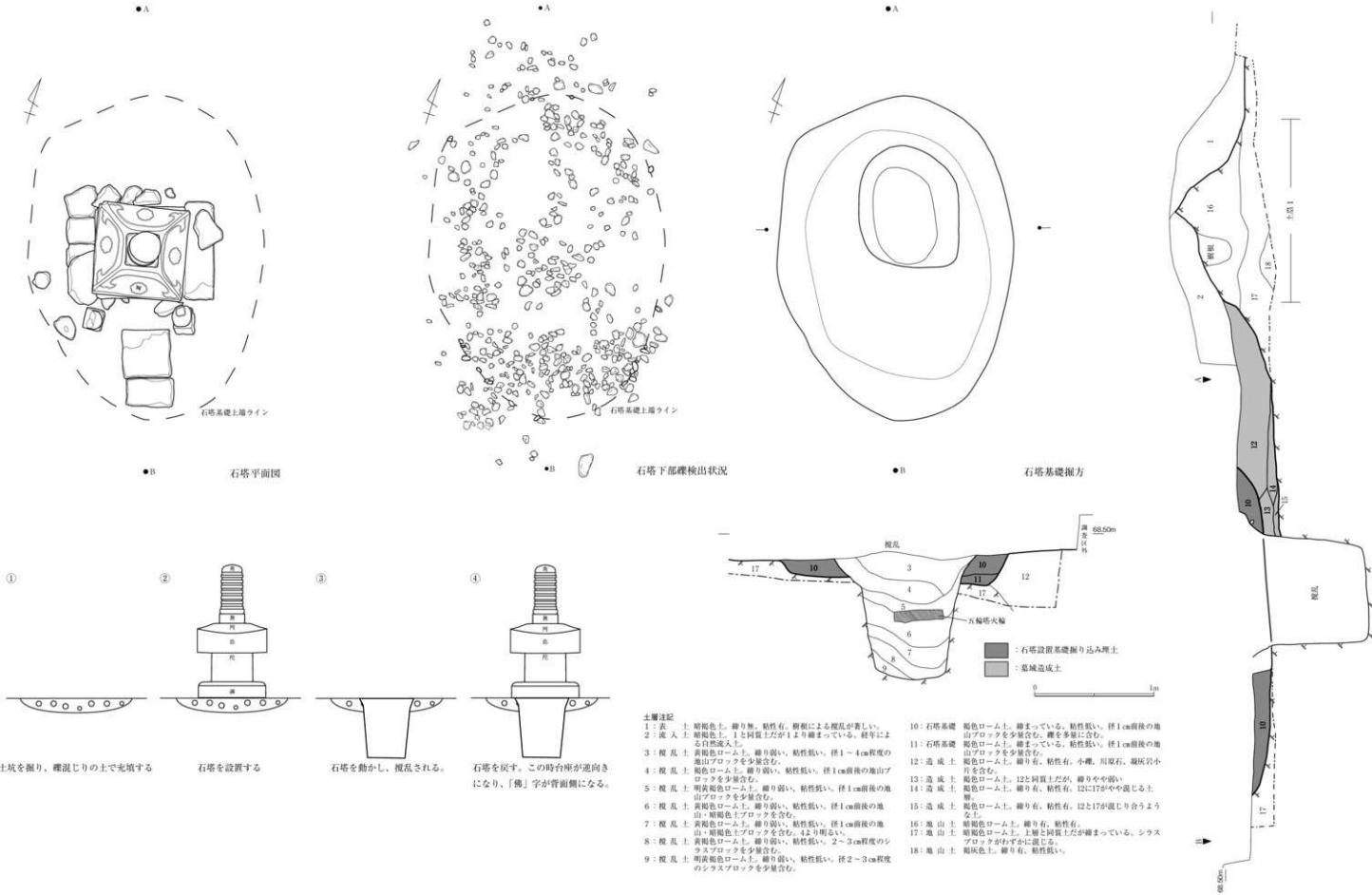
石塔前面には、花活け2個と2枚の豊石が据え付けられていた。花活けは凝灰岩製で、一石を削り出すことで製作されている。4つの脚をもつ長方柱状の基部に、チューリップ形の花活け部分が乗る形状で、頂部から円柱状の穴があけられている。基部側面には縁辺付近に線刻で縁取りがなされており、正面にのみ花弁状の文様が線刻で描かれている。豊石はいずれも凝灰岩製の板石で、塔側に据えられていたものが長さ42cm、幅38cm、厚さ12cm、もう一枚のものが、長さ31cm、幅23cm、厚さ15cmである。

石塔2（第7図）

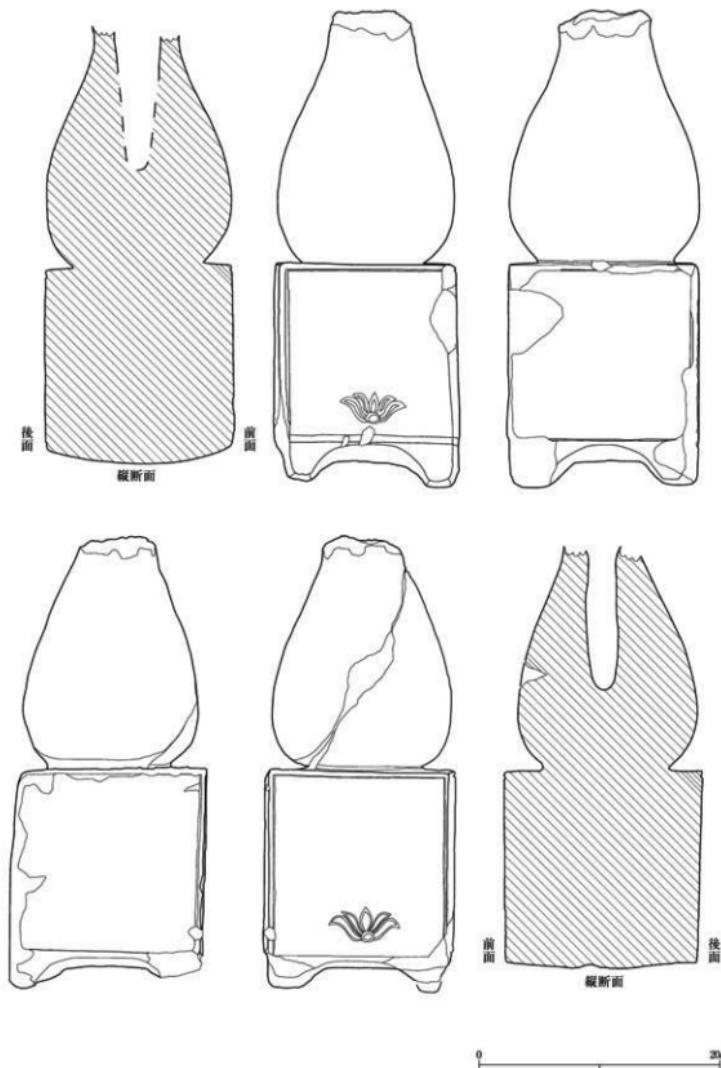
北区北側の土塁1内側、石塔1の西隣において検出された。表土を除去すると東西126cm、南北135cmの範囲に3cm～13cmほどの小礫が散在しており、その範囲のおおよそ中心部分に不整円形で東西105cm、南北96cm、検出面からの深さが17cmの土坑が検出された。土坑には石塔



第4図 石塔1実測図



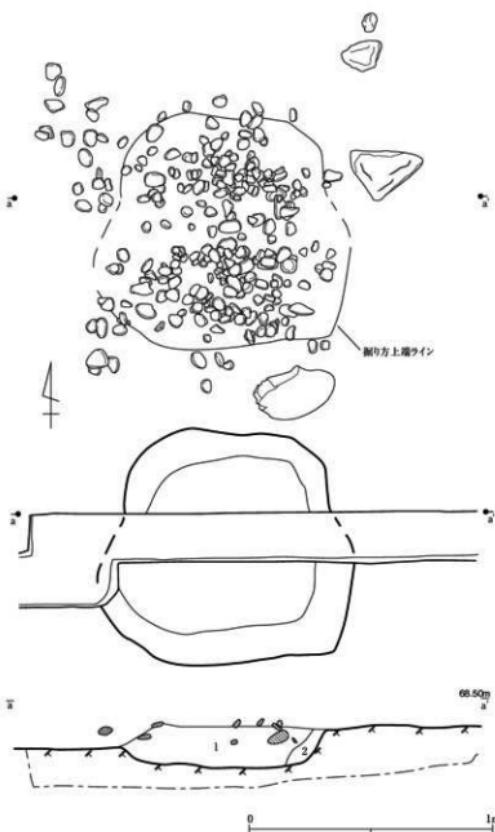
第5図 石塔1下部構造・土壌1土層断面図



第6図 花活実測図

1と同様に小礫が混ざった土層が堆積していた。

構造が石塔1と類似していることと、石塔1に隣り合うように土星1の中に構築されているという位置関係から考えると、この土坑も石塔1と同様に石塔設置に際しての基礎構造であったと判断できる。また、現状では失われているが、本来この土坑の上部には石塔1と並ぶよう石塔が建てられていたものと考えられる。ただし、石塔の据置にともなうものとみられる土坑の規模が石塔1に比べて小規模であるため、この上部に建てられていた石塔は、石塔1よりも幾分小さなものであったと推測できる。



土層注記

- 1: 黄褐色ローム。繊り弱い、粘性低い。1cmほどの地山ブロックを少量含む。
2: 閑色ローム。繊り弱い、粘性低い。1cmほどの地山ブロックを微量含む。

また、小礫の散在範囲外縁に、やや大型の砂岩、凝灰岩が数点検出された。石材が検出された位置は、ちょうど土坑の上端付近に近い位置にある。加えて、石塔1の地輪の周囲を根固めるように凝灰岩の板石や凝灰岩、砂岩の塊石が置かれていた状況をみると、本土坑で検出された大形の石材も石塔1でみられた大型石材と同様の性格を持つと考えられる。

遺物が1点も検出されなかったことなどから、直接的にこの土坑の年代を知ることはできない。しかし、土星内部に配置された石塔1との位置関係をみると、墓域形成当初から土星の内側に2基の石塔を建立するという計画がうかがわれることや同様の構造を持つことなどから、この土坑は、石塔1と同時期に構築されたものと判断するのが妥当と思われるため、石塔1と同様の天正13年前後にその年代を求めておきたい。

第7図 石塔2実測図

集石遺構

集石遺構1（第8図）

南区西側中央付近において検出された。樹根による搅乱で遺構本来の形状は保っていないが、現状において砾は表土直下で、東西79cm、南北137cmの範囲に散在している状況であった。検出された砾は3~16cmの大の砂岩で、角張った形状のものが多い。砾は墓域平坦面作出のための造成土直上に敷かれており、石塔1・2に見られた掘り込みなどの下部構造は存在しなかった。

墓域を形成するための造成土上に構築されていることや、砾を集め積したような遺構の状況に加えて、調査地で検出された遺構が墓に関連する遺構のみであること、本遺構の近辺から錢貨が検出されたことなどから、石塔の基礎構造あるいは集石墓かとも思われるが、遺存状態が悪いことと相俟つて判然としない。

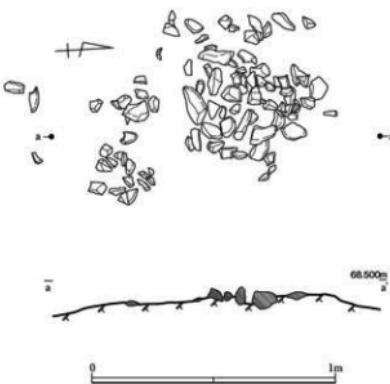
遺構にともなう遺物が検出されておらず、直接遺構の年代を知ることはできないが、遺構が中世の造成土上にあること、調査地内で確認された遺構は中世のもののみであること、中世以降の時期の遺物は確認されていないことなどから、本遺構も中世段階のものと判断できよう。

土坑墓

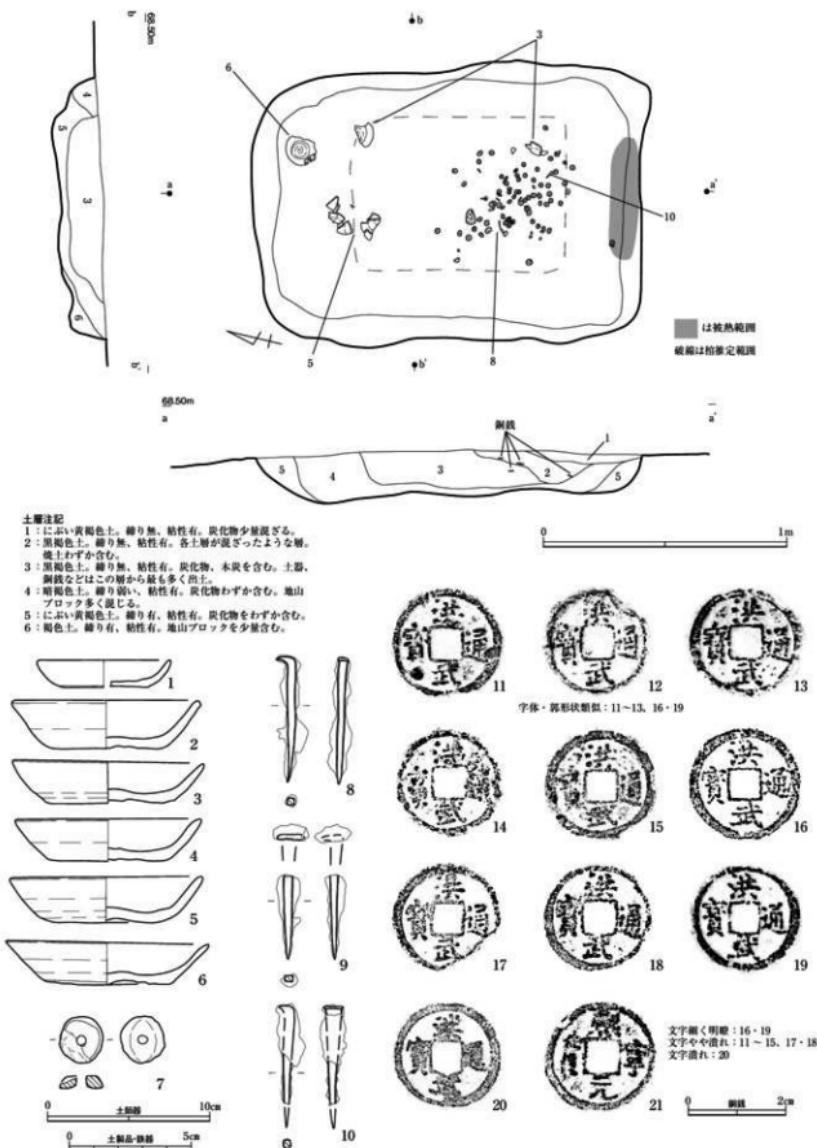
土坑墓1（第9図）

南区の中央付近で検出された。南北方向に長い隅丸長方形の土坑で、長さ160cm、幅117cmである。土坑底面はおおむね平坦だが、壁面との境界の傾斜変換は急で断面形状がおおむねU字形をしている。検出面から土坑底面までの深さは22cmであるが、木根による搅乱層直下での検出のため本来は現況よりもやや深かったものと想定される。

土坑内部には棺やその痕跡を確認することはできなかったが、鉄釘が出土していること、土層の堆積状況から、有機物の棺が存在していたことが推定できる。土層は、堆積状況や色調などから、埋葬時に堆積した埋土と棺腐朽時の流入土に大きく分けることができる。埋葬時堆積土は色調が地山層に近く遺物はほとんど含まれておらず、流入土は黒色あるいは暗褐色で、多くの遺物が出土している。また、土坑底部の土を観察すると、草木の根が多く入っている部分とそうではない部分があった。根が多く入る範囲は土坑墓構築時には空間であった可能性が想定されること、おおむね棺腐朽後の流入土の堆積する範囲と重なっていることなどからみて、この範囲がおおむね棺の底面の形状を反映している可能性が高い。この範囲は土坑同様南北に長く、長さ約85cm、幅60cmである。また、土坑の南小口側がわずかに被烈しているような痕跡



第8図 集石遺構実測図



第9図 土坑墓1及び出土遺物実測図

があることや流入土中に炭が混じるなど、火に関わる痕跡が見いだされたが、その意味については判然としなかった。

本土坑墓からは土師器皿、不明土製品、鉄釘、銭貨が出土した（第9図）。遺物は土坑北側に土師器が、中央やや南寄りに鉄釘、銭貨が集中する状況であった。土師器や銭貨、鉄釘は棺腐朽後の流入土から出土しており、原位置を保っていない。流入土以外の土から出土した土師器（5）は原位置を保っている可能性がある。1～6は土師器皿である。1のみが糸切底で、2～6は粗雑なハラ切底である。1は口縁部がわずかに内傾しており、端部は丸くおさめられている。2～6は体部がおおむね外方へ向かって直線的にのびる形態である。口縁端部はいずれも丸く収められているが、端部付近の厚さには、体部と変わらないままのもの（2、5）、やや膨らむもの（4、6）、すぼまるもの（3）が認められる。内器面の底部と体部の境界は明瞭でなく丸みを帯びている。7は不明土製品である。直径約2cm、高さ約5mmで断面は台形状である。中央に径4mmの孔があり、底面の中心付近には杏仁形のわずかな凹みがつけられている。表面は平滑で丁寧に整形されている印象をうける。8～10は鉄釘である。いずれも頂部が折り曲げられて頭を作り出されており、断面は方形である。8は頭部から先端付近まで横幅がほぼ変わらないのに対し、9、10は頭部側の幅がやや広がる形態である。11～21は銭貨である。本土坑からは100枚近い銭貨が出土しているが、そのうちの一部を図示した。接合作業の結果、銭貨の最少個体数は101枚、最大では113枚となる。銭種の内訳は、第2・3表の通りで、そのほとんどが洪武通宝であった。その他は熙寧元宝が1枚と銭種不明のものがある。これらの銭貨の文字を観察すると、文字の形状、鋳出された文字の太さや郭への文字のかかり方などからいくつかの種類に分類することができる。中には、同じ鋳型での製作かと思えるほど類似する個体がいくつか存在した。鋳による影響や破損、変形などで、詳細な検討をおこなうことはできなかったが、同鋳型で製作された個体が存在するとすれば銭貨の生産から流通、消費の過程を知る上で大変注目すべき出土状況である。

土坑

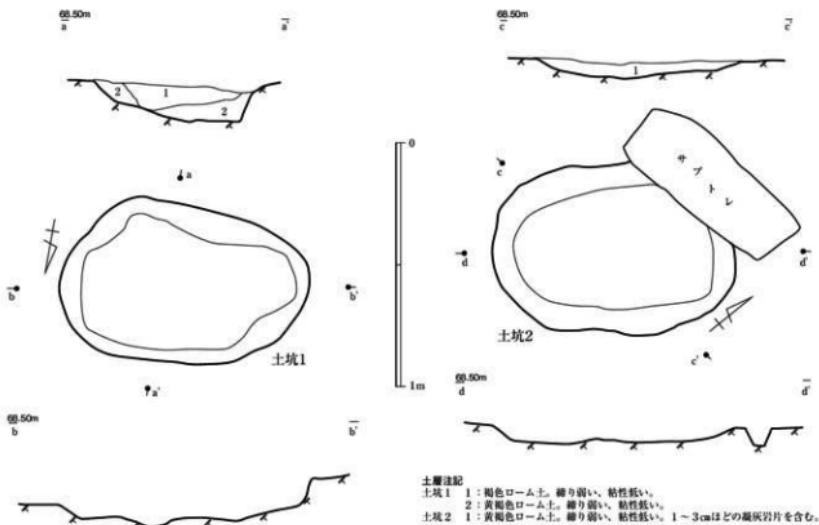
土坑1（第10図）

南区の北側で検出された。東西方向に長い楕円形の土坑で、長さ103cm、幅69cmである。土坑底面はおおむね緩やかにたちあがっているが、北側の一部のみは底面から壁面へ向かって急角度で立ちあがっている。検出面から土坑底面までの深さは18cmで、西側の底面がやや深くなっている。埋土は自然堆積したものと考えられる。

形態が単純であることや遺物が全く出土していないことなどから、この土坑の性格を判断することは難しい。埋土からは、土坑2のような凝灰岩の小片も出土しなかった。構築時期もまた、土坑から遺物が出土していないため、特定することは難しい。

土坑2（第10図）

南区やや南側で検出された。南北方向に長い楕円形の土坑で、長さ99cm、幅71cm、検出面からの深さが8cmの土坑である。土坑底面はおおむね平坦で壁面は緩やかにたちあがっている。土坑北側の一部は試掘時のサブトレーニングによって破壊してしまった。土坑の埋土は、黄褐色土



第10図 土坑1・2実測図

の単層で1cm～5cmほどの凝灰岩の破片を多く含んでいる。調査地周辺にいくつか存在する石塔の石材が、同じく凝灰岩で造られていることから、この凝灰岩の破片はいずれかの石塔を整形する最終段階の時に出た削片である可能性が考えられる。そうであるならば、この土坑の性格は整形時に出た破片を廃棄するためのものであり、墓域において石塔の最終整形がおこなわれたことを示すものであると考えられる。

土坑の時期は、遺物が出土していないため特定は難しい。しかし、同じく凝灰岩で出来た石塔1が中世に位置付けられることから、本土坑も同様の時期のものである可能性もある。また、土坑埋土から出土した凝灰岩は風化が著しい。調査区周辺にある石塔も同様に風化が進んでおり、ほとんどが完全な状態で残っていないことから、これら凝灰岩の破片がどの石塔のものであるのかを判断することは困難であった。

土壠

土壠1（第2・5図）

石塔1、2の周囲をめぐる土壠である。東西7.7m、南北7.5mの隅丸方形に近い形状で、ちょうど石塔1、2の正面にあたる南側が開口しており、幅3mの通路状になっている。したがって、この土壠は、石塔1、2が設置される区画を開くことを目的として構築されたものと考えられる。

土壠上には樹木があり、その樹根による搅乱が著しかったこと、尾根の斜面に近い箇所では一部崩落、流出していたことなどから遺構自体の残存状態が良くない。そのため本来の形状を知ることはできなかった。構築方法などの検討のため、土壠を南北方向、東西方方向に一部を断

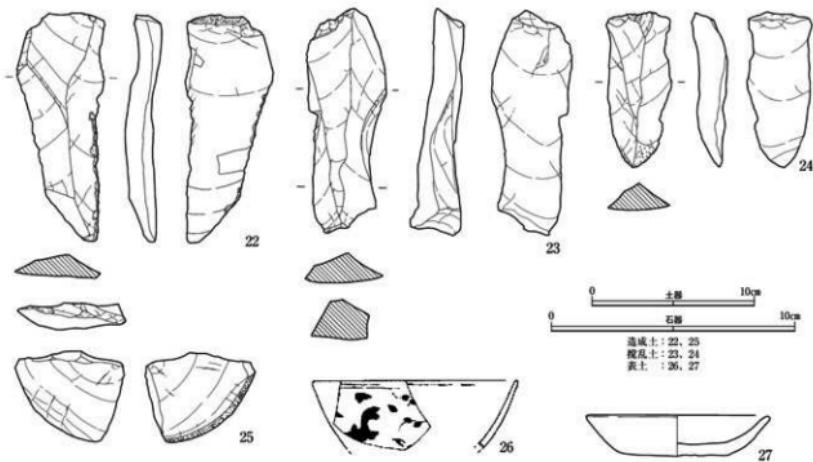
ち割って調査をおこなった結果、土壘の底辺から高さ約50cmの位置までは地山を削り出すことで構築されていると判断できた。おそらく、墓域形成のための造成時に、土壘部分だけ地山を削り残したものと考えられる。このことは、墓域形成の当初から石塔1、2を中心とした区割りがなされていたことを示しており、重要である。土壘本来の高さがわからないために、本来この削り残された地山の上に盛り土がなされていたのか、あるいは全体を地山削り出しで形作られていたのかについては不明であった。

遺構外出土遺物（第11図）

今回の調査では、遺構外からもいくつかの遺物が出土している。遺物には旧石器時代の剥片、縄文土器片、土師器片、染付片がある。そのうち図化できるものについて図示したものが第11図である。

22～25は旧石器時代の遺物である。22は均整のとれた縦長の剥片を素材とするサイドスクリイバーで、黒味がかった頁岩製である。長さ9.3cm、幅3.5cm、厚さ1.4cmである。剥片は節理面を打面にしている。打面が残されているため、打点が明瞭に観察できる。左右の両側縁の主要部分には二次加工の微細な剥離が施されており、刃部の整形がおこなわれている。この剥離は、背面から見て右側縁は背面から、左側縁は腹面から剥離がなされている。

23～25は剥片である。23は縦長でやや大型の剥片で、黒味がかった頁岩製である。剥片は、現状で、長さ9.2cm、幅3.3cmであるが、下部を折損しているため本来はさらに長かったものと判断できる。また、剥片の厚さは、打面側が1.3cm、折損部付近が2.1cmであり、打面側が薄くなっている。背面側に残された前段階での剥離における打面もこの剥片と同一方向であり、剥片剥離にあたって、石核を同一方向から連続的に剥離していた様子がうかがえる。打面は、除



第11図 遺構外出土遺物実測図

去されておらず、打面付近の剥離作業面に細かな調整が認められる。側縁などへの二次加工や使用による微細剥離は存在しない。24も黒味がかった頁岩製の剥片である。長さは6.4cm、幅2.7cm、厚さ1.5cmである。この剥片も23と同様に石核を同一方向に向かって連続的に剥離されてできた剥片である。また、打面が除去されていない点や、打点付近の剥離作業面に細かな調整が認められることも、23と共に共通している。左右側縁への二次加工や使用にともなう微細剥離は認められない。下端部右側には節理面が残されている。25も剥片である。石材は他のものと同様に黒味がかった頁岩である。約半分が折損した横長剥片で、現状の長さは3.7cm、幅は4.5cm、厚さは1.1cmである。翼状剥片のように見えるが、剥片下縁に礫面が残されていることから、通有の剥片であると思われる。打面には打面調整の剥離が施されている。側縁などに二次加工などにともなう微細剥離などは認められない。

これら旧石器時代の遺物は、やや大ぶりな縦長剥片に横長剥片が含まれる組み合わせである。墓域の造成土や搅乱土からの出土であるために、これらが本来同一時期のものであるかについては判断することができない。しかし、石材が同一であることや剥片の特徴など共通点もあることなどから同一時期のものとして捉えることが可能であるとすれば、これらは、旧石器時代宮崎10段階編年の第6段階に相当するものと思われる。

26は染付碗で、口縁部から体部にかけての破片である。外面には染付で草花文が描かれている。小片のため時期などは知れない。27は土師器皿である。底部外面は粗雑なヘラ切底である。やや浅めの器形で、胴部は外方に向かって、わずかに内湾しながら立ち上がっている。内面の底部と胴部との境界は不明瞭で丸みを帯びた形態である。口縁端部は丸くおさめられている。底部のヘラ切が粗雑であることなど土坑墓1から出土した土師器皿と同様の形態をもっていることから、中世に位置付けられるものと考えられる。

第1表 遺物観察表

番号	出土位置	種別	器種	部位	法量 (mm)			調整	参考
					(①)	(②)	(③)		
1	土坑墓1	土器部	皿	口縁～底部	(380.0)	(55.0)	17.0	回転ナダ	回転ナダ 赤切底、～1mmの粒子（褐色、黒斑）を多く含む。
2	土坑墓1	土器部	皿	口縁～底部	(111.0)	(65.0)	30.0	回転ナダ	ヘラ切底、～1mmの粒子（褐色、黒）を多く含む。
3	土坑墓1	土器部	皿	口縁～底部	115.0	62.0	27.0	回転ナダ	ヘラ切底、～1mmの粒子（褐色、黒）を含む。
4	土坑墓1	土器部	皿	口縁～底部	(110.0)	63.0	26.0	回転ナダ	ヘラ切底、～1mmの粒子（褐色、黒）を多く含む。
5	土坑墓1	土器部	皿	口縁～底部	113.0	65.0	27.0	回転ナダ	ヘラ切底、～1mmの粒子（褐色、黒、透明）を含む。
6	土坑墓1	土器部	皿	口縁～底部	123.0	78.0	26.0	回転ナダ	ヘラ切底、～1mm以下の微粒子（褐色、黒）を多く含む。
7	土坑墓1	土器品	皿	口縁～底部	19.0	19.0	5.0	ナダ	ナダ 調査1号室、中心に円孔。
8	土坑墓1	器部	鉢	定形	52.0	30	3.0	—	頭部折り曲げて作られる。
9	土坑墓1	器部	鉢	頭部・脚部	(52.0)	30	3.0	—	頭部折り曲げて作られる。
10	土坑墓1	器部	鉢	頭部・側部	40.0	30	6.0	—	頭部折り曲げて作られる。
11	土坑墓1	鉢質	酒甕	ほぼ定形	—	—	—	—	第2表No70
12	土坑墓1	鉢質	酒甕	酒甕通字	ほぼ定形	—	—	—	第2表No19
13	土坑墓1	鉢質	酒甕	酒甕通字	ほぼ定形	—	—	—	第2表No9
14	土坑墓1	鉢質	酒甕	酒甕通字	ほぼ定形	—	—	—	第3表No83
15	土坑墓1	鉢質	酒甕	酒甕通字	定形	—	—	—	第3表No73
16	土坑墓1	鉢質	酒甕	酒甕通字	定形	—	—	—	第2表No64
17	土坑墓1	鉢質	酒甕	酒甕通字	一部欠損	—	—	—	第2表No30
18	土坑墓1	鉢質	酒甕	酒甕通字	定形	—	—	—	第3表No95
19	土坑墓1	鉢質	酒甕	酒甕通字	定形	—	—	—	第2表No33
20	土坑墓1	鉢質	酒甕	酒甕通字	定形	—	—	—	第3表No94
21	土坑墓1	鉢質	煎甕元皿	定形	—	—	—	—	第3表No105
22	造成	石器	スケレーバー	定形	93.0	35.0	14.0	—	頭部に微細剥離
23	複数	石器	剥片	下部側縁	92.0	33.0	21.0	—	下部の方が剥離がある剥片
24	複数	石器	剥片	定形	64.0	27.0	15.0	—	背面に擦摩面認められる
25	造成	石器	剥片	半寸折損	37.0	45.0	11.0	—	半分を折損した極長剥片
26	表土	礫器	網	口縁	(125.0)	—	—	—	草花文、表面は粗雑
27	表土	土器部	皿	口縁～底部	(108.0)	70.0	25.0	回転ナダ	回転ナダ ヘラ切底、～1mmの粒子（褐色、黒）を含む。

*「法量」は土器の場合(口径×底径×高さ)、土製品・鉢器・石器の場合(長さ×幅×厚さ)を示す。数据は現存最大の数据、復元前の場合()付。

第2表 出土銭貨観察表1

No	取上No	出土位置	銭種	残存率 (%)	法量 (mm)			備考 (加工等)	
					外形	内径	厚さ	文字部	輪部
1	8	土坑墓1	洪武通宝	ほぼ完形	22.0	6.7	0.6	1.2	状態悪い
2	9	土坑墓1	洪武通宝	ほぼ完形	—	—	0.8	0.8	鋲ひどい
3	10	土坑墓1	洪武通宝	80	22.8	6.6	0.5	1.2	郭内に鋲バリ
4	11	土坑墓1	洪武通宝	完形	22.9	6.4	0.5	1.4	郭に鋲バリ
5	12	土坑墓1	洪武通宝	完形	23.2	5.5	0.7	1.5	郭に鋲バリ
6	13	土坑墓1	洪武通宝	一部欠損	22.5	5.9	0.6	1.2	文字不鮮明
7	14	土坑墓1	洪武通宝	完形	22.8	6.2	0.5	1.0	
8	15	土坑墓1	洪武通宝	完形	22.6	5.1	0.5	1.3	わずかに変形、郭に鋲バリ
9	16	土坑墓1	洪武通宝	ほぼ完形	22.0	5.7	0.6	1.3	2つに割れている
10	17	土坑墓1	洪武通宝	完形	22.2	6.0	—	1.3	三枚が接着している
11	17b	土坑墓1	洪武通宝	完形	23.0	5.9	—	1.3	文字不明瞭
12	17c	土坑墓1	?	完形	—	—	—	—	鋲着で文字見えない
13	18	土坑墓1	洪武通宝	50	—	—	0.5	1.0	「武」・「寶」字部分
14	19	土坑墓1	洪武通宝	完形	22.6	5.6	0.6	1.3	郭に鋲バリ
15	20	土坑墓1	洪武通宝	完形	24.1	5.9	0.6	1.3	文字不明瞭
16	21	土坑墓1	洪武通宝	75	24.0	6.8	0.7	1.4	細片化している
17	21b	土坑墓1	洪武通宝	25	—	—	0.5	1.1	細片「寶」字部分
18	22	土坑墓1	洪武通宝	完形	22.2	5.8	0.6	1.3	「洪」字横穴アキ
19	23	土坑墓1	洪武通宝	ほぼ完形	21.7	6.0	0.4	1.2	「武」字左に星、郭やや不整形
20	24	土坑墓1	洪武通宝	80	22.3	6.8	0.5	1.1	鋲で文字不明確
21	25	土坑墓1	洪武通宝	50	—	—	0.7	1.2	「洪」・「寶」字部分残存、文字不鮮明
22	25b	土坑墓1	洪武通宝	30	—	—	0.4	0.8	「武」・「寶」字の一部のみ
23	26	土坑墓1	洪武通宝	完形	22.5	6.3	0.7	1.3	穿は内孔状に穿孔されている
24	27	土坑墓1	洪武通宝	90	21.7	6.7	0.4	1.0	薄くてもろい印象、穴アキ
25	28	土坑墓1	洪武通宝	完形	22.1	6.1	0.5	1.2	「洪」字横穴アキ
26	29	土坑墓1	洪武通宝	完形	23.6	5.7	0.7	1.3	状態やや不良
27	30	土坑墓1	洪武通宝	完形	21.0	5.8	0.7	1.2	文字不明瞭
28	31	土坑墓1	洪武通宝	完形	22.8	6.6	0.5	1.0	薄い、風化、穴アキ
29	32	土坑墓1	洪武通宝	完形	21.9	5.9	0.4	1.2	穴アキ、風化している
30	32b	土坑墓1	洪武通宝	90	22.3	5.6	0.5	1.3	一部欠損、風化、郭内鋲バリ
31	33	土坑墓1	洪武通宝	完形	22.0	4.8	0.6	1.3	郭内鋲バリで円孔風。背側にメクレ有
32	34	土坑墓1	洪武通宝	完形	21.7	6.7	0.7	1.2	文字不鮮明、郭に鋲バリ
33	35	土坑墓1	洪武通宝	完形	22.2	5.6	0.6	1.7	質良い、文字精美
34	36	土坑墓1	洪武通宝	ほぼ完形	22.4	6.1	0.6	1.2	文字不鮮明。他の個体の破片付着
35	36b	土坑墓1	?	60	—	—	—	1.3	面側が鋲着しており銭種不明
36	37	土坑墓1	洪武通宝	50	—	—	0.6	1.4	鋲で文字不鮮明
37	38・39	土坑墓1	洪武通宝	80	—	—	0.6	0.9	細片化、文字不鮮明
38	41	土坑墓1	洪武通宝	完形	23.3	5.9	0.7	1.1	文字不鮮明
39	42	土坑墓1	洪武通宝	90	22.8	6.0	0.4	1.3	変形している。文字不鮮明
40	44	土坑墓1	洪武通宝	80	—	—	0.5	0.7	文字不明瞭
41	45	土坑墓1	洪武通宝	完形	22.3	6.1	0.7	1.4	郭にわずかに鋲バリ残存
42	46	土坑墓1	洪武通宝	完形	21.8	6.3	0.5	1.2	質悪い、郭に鋲バリ
43	47	土坑墓1	洪武通宝	完形	22.4	5.9	0.6	1.3	文字鮮明
44	47b	土坑墓1	洪武通宝	完形	23.5	5.4	0.6	1.3	47と同范? やや文字潰れ
45	48	土坑墓1	洪武通宝	完形	22.4	6.4	0.5	1.3	穴アキ、文字不鮮明
46	49	土坑墓1	洪武通宝	30	—	—	0.3	1.0	破片。字体は35・64に類似
47	50	土坑墓1	洪武通宝	70	23.2	4.6	0.7	1.5	細片化している、「通」字部分一部欠損
48	51	土坑墓1	洪武通宝	ほぼ完形	23.0	6.3	0.7	1.1	一部欠損。
49	52	土坑墓1	?	20	—	—	—	—	鋲、細片化のため文字判読不可能
50	53	土坑墓1	洪武通宝	30	—	—	0.5	1.3	細片
51	53b	土坑墓1	洪武通宝	20	—	—	0.5	1.1	細片
52	54	土坑墓1	洪武通宝	80	22.4	6.2	0.5	0.9	細片だが、完形近くまで復元可能
53	55	土坑墓1	洪武通宝	ほぼ完形	22.8	6.5	0.6	1.4	一部欠損
54	56	土坑墓1	洪武通宝	完形	22.7	6.0	0.6	1.2	文字ややつぶれ、状態良い
55	57	土坑墓1	洪武通宝	90	22.3	5.8	0.7	1.3	一部欠損
56	58	土坑墓1	?	10	—	—	—	—	輪の一部のみ
57	59	土坑墓1	洪武通宝	完形	24.0	6.0	0.7	1.5	郭に鋲バリ

第3表 出土銭貨観察表2

No	取上No	出土位置	銭種	残存率 (%)	法量 (mm)			備考 (加工等)	
					外形	内径	厚さ 文字部	輪部	
58	59b	土坑墓1	洪武通宝	完形	23.0	5.0	0.6	1.3	郭は円孔仕上げ、『通』横に湯口バリ?
59	60	土坑墓1	洪武通宝	90	23.0	6.3	0.7	1.4	一部欠損
60	61	土坑墓1	洪武通宝	ほぼ完形	23.0	6.0	0.6	1.2	一部欠損、郭は円孔
61	62	土坑墓1	?	完形	21.9	5.9	—	—	2枚接着で字見えない
62	62b	土坑墓1	?	完形	22.1	5.7	—	—	2枚接着で字見えない
63	63	土坑墓1	洪武通宝	50	—	—	0.5	1.2	
64	64	土坑墓1	洪武通宝	完形	24.0	6.0	0.4	1.5	武の右横に星、文字精美
65	65	土坑墓1	洪武通宝	ほぼ完形	23.0	6.3	0.7	1.3	文字不明瞭
66	66	土坑墓1	洪武通宝	ほぼ完形	23.6	5.6	0.8	2.0	わずかに欠損
67	67	土坑墓1	洪武通宝	ほぼ完形	22.0	5.9	0.7	1.4	背面の輪一部幅広くなっている
68	68	土坑墓1	洪武通宝	ほぼ完形	23.2	6.0	0.6	1.9	わずかに欠損
69	69	土坑墓1	洪武通宝	ほぼ完形	22.5	6.2	0.7	1.2	状態悪
70	70	土坑墓1	洪武通宝	ほぼ完形	23.0	6.0	0.4	1.7	穴アキ、郭に鑄バリ
71	71	土坑墓1	洪武通宝	70	—	—	0.5	1.0	細分化、各文字はかなり不明瞭
72	72	土坑墓1	洪武通宝	完形	23.3	5.4	0.8	1.4	郭に鑄バリ
73	73	土坑墓1	洪武通宝	完形	22.8	5.5	0.6	1.3	鑄ひどい
74	74	土坑墓1	洪武通宝	ほぼ完形	23.0	6.1	0.4	1.2	「洪」字左下穴アキ
75	75	土坑墓1	洪武通宝	完形	23.4	6.0	0.6	1.1	20に似るがやや「武」字の形違う
76	76	土坑墓1	洪武通宝	ほぼ完形	22.7	6.2	0.6	1.3	鑄ひどい、背面の郭が一部幅広化
77	77	土坑墓1	洪武通宝	25	—	—	0.5	1.3	細分化している
78	78	土坑墓1	洪武通宝	完形	22.2	5.9	0.7	1.3	
79	79	土坑墓1	洪武通宝	完形	22.6	5.8	0.6	1.3	郭に鑄バリ
80	80	土坑墓1	洪武通宝	ほぼ完形	21.9	5.6	0.7	1.2	一部欠損、鑄ひどい
81	81	土坑墓1	洪武通宝	80	22.0	6.2	0.4	1.0	半折れ、穴アキ
82	83	土坑墓1	洪武通宝	90	22.8	6.8	0.4	1.3	「通」字斜めになっている、穴アキ
83	84	土坑墓1	洪武通宝	ほぼ完形	22.0	5.7	0.7	1.3	鑄で文字不明瞭
84	85	土坑墓1	洪武通宝	ほぼ完形	22.6	—	0.5	1.3	2枚接着(85・86)の内接合する方
85	86	土坑墓1	洪武通宝?	50	—	—	0.5	1.3	面側が接着しており文字見えない
86	87	土坑墓1	洪武通宝	完形	22.7	6.2	0.4	1.6	郭内に鑄バリ
87	88	土坑墓1	洪武通宝	80	—	—	0.5	1.2	破損している。鑄ひどい
88	89	土坑墓1	洪武通宝	ほぼ完形	22.3	6.0	0.4	1.3	一部欠損
89	90	土坑墓1	洪武通宝	完形	23.1	5.8	0.6	1.3	郭内に鑄バリ
90	91	土坑墓1	洪武通宝	完形	22.1	5.0	0.4	1.2	鑄ひどい
91	92	土坑墓1	洪武通宝	90	21.8	6.4	0.4	1.1	鑄ひどい
92	93	土坑墓1	洪武通宝	90	23.2	6.0	0.7	1.3	一部欠損、郭内に鑄バリ
93	94	土坑墓1	洪武通宝	完形	22.3	5.5	0.5	1.1	文字ややつぶれ
94	95	土坑墓1	洪武通宝	ほぼ完形	22.3	5.9	0.4	1.2	穴アキ、文字つぶれ
95	96	土坑墓1	洪武通宝	完形	22.3	6.3	0.4	1.2	面側の輪にズレ?
96	97	土坑墓1	洪武通宝	75	—	5.8	0.6	1.2	欠損、小片化
97	98	土坑墓1	洪武通宝	90	22.7	5.2	0.5	1.2	一部欠損、郭内に鑄バリ
98	99	土坑墓1	洪武通宝	ほぼ完形	21.0	6.3	0.5	1.1	鑄ひどい、風化
99	—括	土坑墓1	洪武通宝	完形	22.0	5.9	—	—	「通」字上穴アキ
100	—括	土坑墓1	?	完形	22.0	6.2	—	—	100に面が接着し、文字不明
101	—括	土坑墓1	洪武通宝	完形	22.2	5.7	0.5	1.3	郭内不鑄バリ
102	—括	土坑墓1	洪武通宝	50	—	5.0	0.6	1.4	破片化している。鉄分付着
103	—括	土坑墓1	洪武通宝	20	—	—	0.6	1.2	細片化している「武」のみ確認できる
104	—括	土坑墓1	洪武通宝	75	23.0	5.8	0.7	1.2	破片化している。「武」のみ欠損
105	—括	土坑墓1	熙元寧宝	完形	23.5	6.6	0.8	1.4	文字やや見にくく
106	—括	土坑墓1	洪武通宝	50	—	—	—	—	鑄ひどい
107	—括	土坑墓1	?	15	—	—	0.8	1.5	鑄ひどい
108	—括	土坑墓1	洪武通宝	15	—	—	0.8	1.2	鑄ひどい
109	—括	土坑墓1	洪武通宝	10	—	—	0.5	1.3	「武」字、欠損
110	—括	土坑墓1	洪武通宝	15	—	—	0.7	1.1	状態悪い
111	—括	土坑墓1	洪武通宝	10	—	—	0.7	—	「洪」、「寶」付近の細片
112	—括	土坑墓1	洪武通宝	40	—	—	0.8	1.7	「通」字一部欠損
113	—括	土坑墓1	?	5	—	—	—	1.3	輪の一部のみ

第4節 まとめ

今回の調査は、土地の造成にともなっておこなわれた発掘調査である。調査地は、尾根状地形の先端部に位置しており、木々が茂る山林の状態であった。伊東家家臣で内山城主であった野村備中守文綱の墓と伝わる石塔が所在することが以前から知られていた場所で、調査地周辺には、そのほかに五輪塔や板碑が点在しており、中世から近世にかけて墓域として利用されていたことがわかる。

調査地は、現状において尾根先端部の、ある程度の広さをもった平坦面上であった。この平坦面は調査の結果、中世段階に墓域を確保するためにおこなわれた造成による土地改変の結果であることが明らかとなった。また、造成時には、石塔1、石塔2を設置するための区画としての土塁が地山を削り出すことで形作られている。地山削り出しによる土塁構築からは、この墓域が当初から土塁区画の中にある石塔を中心とし、その外側に作られた平坦部分に土坑墓や石塔が配置されるという、ある程度の計画性をもって作られたものであることが推測される。また、墓参のための通路は、尾根の東側にある谷から緩やかに傾斜する道が現状でも確認でき、谷筋からこの道を通って尾根上まで上っていたものと想定される。

今回調査で注目されたのが、中世石塔の存在であった。石塔は、地輪に方形の塔身が乗り、その上に笠形の火輪、相輪が重ねられる形態の石塔で、いわゆる伊東塔と呼ばれるものである。伊東塔は、伊東氏一族やその家臣などの墓標、供養塔として採用された石塔で、宮崎県域、特に伊東氏の本拠地であった西都市、清武、飫肥周辺に多く見られる。

調査地にあった伊東塔には塔身部分正面に「時天正十三年 西乙 漢阿弥陀佛 十二月十日 敬白」という銘文が刻まれている。また、各部材の正面に「南無阿弥陀佛」の文字が刻まれている。地輪や相輪の露盤に彫られた蓮花は浮彫で、屋根流れや塔身前面や側面にも線刻による装飾や雲形格狭間や火輪底面の垂木表現など、装飾性が高い。また、今回の調査では石塔の下部構造も明らかとなった。石塔下部には楕円形の土坑が掘られ、その中に円碟を混ぜた土を充填し石塔設置の基礎としていたことがわかった。埋葬施設などは確認できず、この石塔は參り墓であったと考えられる。

こうした石塔は後世に倒壊や移動にともなって部材が失われたり本来の組合せとは異なった部材が積み上げられることが多く、石塔研究の妨げとなっている。しかし本例は建立時本来の組合せを保っていると判断できる。加えて年号が刻まれていることから、製作年代も明らかであるため、伊東塔の年代的研究の一つの定点となる資料といえる。この石塔は伊東家臣で後に島津方に内応した野村備中守文綱の墓であるとの伝承があるが、その可否については明らかでない。なお、本石塔は調査時に宮崎市天ヶ城歴史資料館に移設した。

石塔に加えて、土坑墓から検出された銭貨にも注目される。土坑墓は隅丸方形で小型のものであったがその埋土の中から100枚以上の銭貨が検出された。銭貨は最少個体数101枚、最大で113枚にも上る。そのうち銭種不明の9枚を除くとほぼすべてが洪武通宝で、一枚のみ熙寧元宝が含まれていた。出土状況は埋土中に散在する状況であり、土層観察と併せて考えると、本来は棺の上面におかれているものが、棺の腐朽にともなって土坑墓内へ流れ込んだものと思われる。宮崎県下での土坑墓出土銭貨枚数は、西都市の岳懸寺遺跡14号土坑の107枚が最高であ

るが、本例はそれと同等の枚数であり、県下で最も銭貨が出土した土坑墓の一つと言える。

今回は詳細な検討をおこなうことができなかつたが、拓影や直接の肉眼観察によって、鋳出された文字が極めて類似し、同范とも思えるような銭貨の存在が確認された。もしそうであれば、銭が生産されどのようない経緯を経て当地へもたらされたのかについて検討する重要な情報となりえる。今後の検討課題である。

最後に当地にこのような墓域が形成されたことの背景について触れておきたい。調査地が所在する高岡周辺の中世に関しては、記録や調査例が少ないために、その状況は明らかでない部分が多い。しかし、近世末に書かれた『高岡名勝志』、『高岡郷士系譜』、『野尻名称誌・高岡由緒』などから、断片的ではあるが中世における高岡周辺の状況を知ることができる。

中世において高岡周辺は伊東氏と島津氏の激しい争いの舞台であった。その中で、大淀川から北方の綾方面へ抜けるルート（第1図）が重視されたことから、その一つであった内山城を中心とする地域も重要拠点のひとつとなり、ルート上には池之尾城、尾谷城、福ヶ城、平賀城など城郭群が連ねられていた。今回調査地は、このルート上にあり、尾谷城とされている場所を望むような地点にあたる。加えて、『野尻名称誌・高岡由緒』には、尾谷城に関する記述があり、野村備中守などが居城し、墓が残されていて野村新左衛門がそれを祀っているとある。今回調査した石塔1には野村備中守文綱墓との伝承が残されていること、地理的位置などから、『野尻名称誌・高岡由緒』に記述された尾谷城はまさに今回調査地にあたるものと判断してよいだろう。

こうした、中世における伊東氏、島津氏を中心とした歴史的背景の上に、当地にこうした墓域が形成されたものと思われる。墓主や、周辺の城郭、集落などの関係についての詳細は今後の周辺での調査研究の進展をまって明らかにしていかなければならない。

参考文献

- 安藤正純2008 「宮崎県内遺跡出土の六道銭」『宮崎考古』第21号 宮崎考古学会
- 荻原真一編2004 「中世墓資料集成－九州・沖縄編（2）－」中世墓資料集成研究会
- 島田正浩編1998 「天ヶ城跡」高岡町埋蔵文化財調査報告書第16集 高岡町教育委員会
- 島田正浩編2005 「高岡麓遺跡（12地点）」高岡町埋蔵文化財調査報告書第39集 高岡町教育委員会
- 瀬之口傳九郎1942 「日向之金石文」『宮崎懸史蹟名勝天然紀念物報告』第12編 宮崎懸
- 高岡町史編さん委員会編1987 『高岡町史（上巻）』高岡町
- 永友良典ほか編 『山内石塔群』宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第1集 宮崎県教育委員会
- 『綾町中原家文書』『野尻名称志・高岡由緒』
- 『高岡名勝志』
- 『高岡郷士系譜』
- 宮崎県旧石器文化談話会2005 「宮崎県下の旧石器時代遺跡概観」『旧石器考古学』66号 旧石器文化談話会
- 宮島了誠編2002 「出土銭貨研究の最前線」季刊考古学第78号 雄山閣
- 櫻木晋一2005 「中世出土銭貨研究の課題と展望」『月刊 考古学ジャーナル』No526 ニューサイエンス社

写真図版 1



調査地遠景（西から）



調査区全景（南東から）

写真図版2



石塔1・2調査状況（南西から）



石塔1正面（南から）



石塔1右側面（西から）

写真図版 3

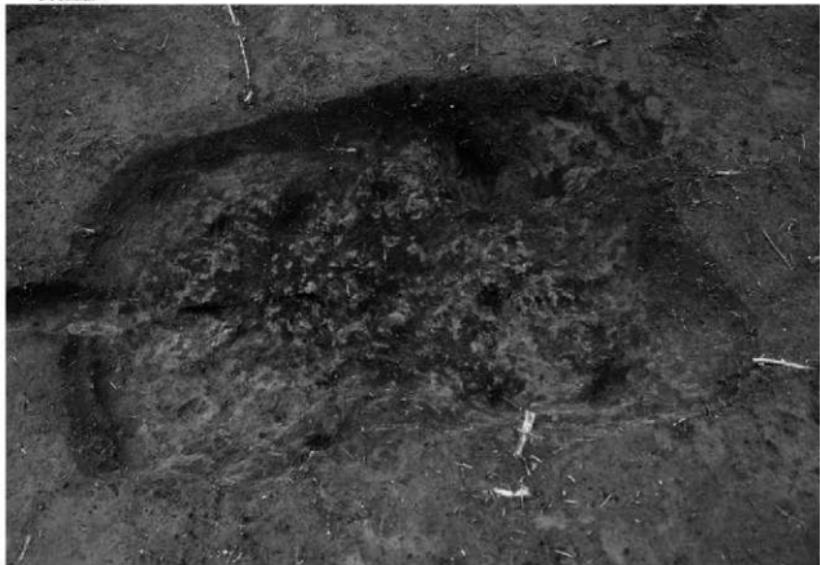


上段左：石塔 1 下部発掘状況（南から）、上段右：同完掘状況（南西から）
下段左：石塔 2 下部発掘状況（南から）、下段右：同完掘状況（南から）

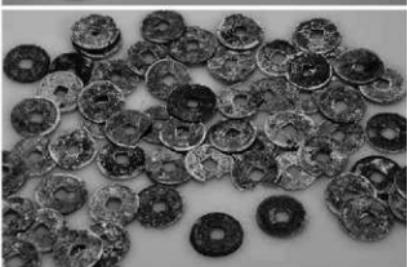
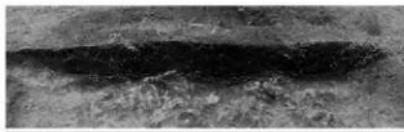


石塔 1・2 完掘状況（南から）

写真図版4



土坑墓1完掘状況（西から）



左上段：土坑墓1土層断面（西から）

左中段：同遺物出土状況（西から）

左下段：同出土遺物（鉄釘、不明土製品）

右列：同出土遺物（土師器、銭貨）

写真図版 5



調査区（南区南壁）土層断面（北から）



左上：集石遺構検出状況（南から）

右上：土坑1完掘状況（東から）

右下：土坑2完掘状況（東から）



写真図版6



遺構外出土遺物



左上：旧石器出土状況
右上：石塔測量状況
左下：石塔移設状況



報告書抄録

ふりがな	みやざきしないいせきはっくつちょうさほうこくしょ								
書名	宮崎市内遺跡発掘調査報告書								
調書名	平成21年度・平成22年度国庫補助対象事業発掘調査報告書								
シリーズ名	宮崎市文化財調査報告書								
シリーズ番号	第89集								
編集者名	石村 友規								
発行機関	宮崎市教育委員会								
所在地	〒880-0805 宮崎市橘通東1丁目14番20号								
発行年月日	2012年3月30日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東經	調査期間	調査面積	調査原因		
下北方花切 第1遺跡	宮崎市下北方町花切		31°56'46" 付近	131°24'46" 付近	20091207～ 20091228	72m ²	個人住宅		
下北方戸林 第1遺跡	宮崎市下北方町戸林		31°56'41" 付近	131°24'32" 付近	20100810～ 20100824	38m ²	個人住宅		
弓袋 第2遺跡	宮崎市高岡町内山		31°57'23" 付近	131°17'7" 付近	20101115～ 20101222	234m ²	土地造成		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項				
下北方花切第1遺跡	集落	古代	土坑墓・堅穴建物・ 土坑・溝・ピット	鉄鏃・刀子・古代須恵器・ 古代土師器					
下北方戸林第1遺跡	集落	古代	ピット	古墳土師器・古墳須恵器・ 古代須恵器・青磁					
弓袋第2遺跡	墓	中世	石塔・土坑墓・集石 遺構・土坑・ピット	中世土師器・銭貨					
要約	下北方花切 第1遺跡	古墳時代の遺構として、多数の鉄鏃を副葬した土坑墓を1基検出した。また古代の遺構として4軒の堅穴建物を検出したが、うち3軒において火處が確認された。その内訳は窓と土器埋設炉の併設・窓のみ・土器埋設炉のみと3軒とも異なるものであり、土器埋設炉と窓の利用方法を考える上で重要な資料と言える。							
	下北方戸林 第1遺跡	時期は明確ではないが、17基のピットが検出された。また、調査地においては古代から近世にかけての土地改変が明らかとなり、周辺の土地利用のあり方をうかがうことが出来た。また、これらの土層から繩文時代から近世までの様々な時代の遺物が出土している。							
	弓袋 第2遺跡	中世の石塔や土坑墓などが確認された。墓域は尾根を造成することで形成されていた。石塔はいわゆる伊東塔で、天正13年の銘があり、遺存状態も良好である。また、土坑墓からは洪武通宝を中心とした100枚を超える銭貨が出土しており注目できる。							

宮崎市文化財調査報告書 第89集

宮崎市内遺跡発掘調査報告書

平成21年・平成22年国庫補助対象事業
発掘調査報告書

2012年3月
発行 宮崎市教育委員会

